日文研

2013年9月　no.51

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

方広寺図（モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』1669 年版所収）

オランダ人は、江戸参府の帰路に京都で数日間観光することが、慣例により許されていた。観光スポットとして、三十三間堂や清水寺と共に、方広寺が定番であった。方広寺の大仏は、特にオランダ人の印象に残ったようである。本図は 1649 年のフリシウスの使節が方広寺を訪れた場面を描いたものである。来日経験のないオランダの絵描きは、日記に記載されている情報を元に想像力を働かせて、建物や仏像の形を描いている。当時の大仏殿は京都の中でも目立つ壮大な建物で、その中に納められていた大仏は日本三大大仏の一つであったが、現存していない。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日文研

——エッセイ——

小特集「これからの日文研、将来の日本研究に向けて」

戸部良一　転換期の日文研　2

ウィーベ・カウテルト　文明は文字だけではない——世界に通じる日文研へ　8

酒井直樹　国民文化研究と文明論的転移　16

劉　建輝　「帝国」史としての日本研究——日文研プロジェクトの試み　29

鈴木貞美　広く長く、そして深く——外国人研究者とつきあう法　33

フレデリック・クレインス　文明史研究における外書コレクション——日本資料専門家欧州協会二〇一二年会議を振り返って　39

——センター通信——

山本小百合・奥田増栄　コモンルームだより　45

堀まどか　木曜セミナーから学ぶ　47

森　洋久　アーカイヴということ　50

共同研究　53

基礎領域研究　70

彙報　71

所員活動一覧　81

エッセイ

小特集「これからの日文研、将来の日本研究に向けて」

転換期の日文研

戸部良一

「転換期」というタイトルを掲げてはみたものの、よく考えると、私は転換以前の日文研のことをあまりよく知らない。だから、この拙文は羊頭を掲げて狗肉を売ってしまうことになりかねない。それに、激しい変化の中にあった近代以降の日本人はいつも自分が転換期に生きていると思いがちである。私もその例外ではないのかもしれない。

ただ、人の動きを見れば、日文研が転換期にあることは一目瞭然である。というのは、創立時代以来在籍した人を含む教員の多数が、ここ数年、定年を迎えているからである。具体的に人名を挙げよう。二〇一一年度末に猪木武徳氏と安田喜憲氏が、二〇一二年度末には宇野隆夫氏と鈴木貞美氏が退職した。二〇一三年度末には白幡洋三郎氏と私が、二〇一四年度末には笠谷和比古氏、末木文美士氏、早川聞多氏が退職することになる。四年間に九人である。専任教員の約三分の一に相当する。これだけの人数が退職すれば、好むと好まざるとにかかわらず、

組織の特色あるいは性格が変わる可能性が高くなると考えざるを得ない。世代交代が進むからでもある。

しかも昨年二五周年を迎えた日文研は、あと数年で三〇年を閲し、一世代を生きたことになる。だいたい組織や制度はおおむね一世代で有効性を摩耗してしまうのが普通である。こうした意味でも、日文研は転換期にあると言ってよい。

転換期にあるとしたら、いま何を問題とすべきなのか。おそらく理念を再吟味する必要はない。理念とは、国際的・学際的・総合的な観点から日本研究（日本学）を開拓し発展させ、日本を含む世界各地の日本研究者に対して研究支援を行ない、日本研究の国際的な拠点であること、と理解しておこう。日本研究の国際的な拠点「であること」であって、「となること」ではない。現在形であって、目標としての未来形ではない、と私は理解している。

理念をめぐる議論は、どこでも熱が入り面白いものだが、だいたいのところ生産的ではない。世の中がひっくり返ってよほどの必要性が生じたときは別として、多くの場合、理念論争は、論争のための論争になりかねない。問題とすべきは、理念を生かす仕組み、装置、仕掛け、ではないだろうか。

例えば、日文研の表看板である共同研究も、日文研の特色を反映する多数の外国人研究員も、理念を実現するための装置、仕掛けにほかならない。装置、仕掛けであるとしたら、その設計を見直す必要はないのか。運用を再吟味すべきではないのか。こうしたことをつねに問いかけてゆかないと、組織には「馴れ」が生じ、「馴れ」はともすると「堕落」や「腐敗」につながる。

共同研究を考えてみよう。白幡氏がよく指摘しているように、いまやどの大学でも、どの研

究所でも、共同研究なるものを展開している。そうしたなかで日文研の共同研究はどこが違うのか。どこに独特の特長があるのか。国際性・学際性・総合性とお題目のように唱えるだけでは、もちろん充分ではない。『国際日本文化研究センター25年史―資料編―』をめくってみると、初期のころの共同研究は必ずしもこのお題目を意識していたようには見えない。しかし、にもかかわらずと言うべきか、それともそれゆえにと言うべきか、多くの共同研究は何とも魅力的である。この魅力は何に由来していたのか。日文研発足時の熱気なのか。共同研究を組織したヒト、参加したヒトのなせるわざなのか。ほかに何か理由があったのか。

私見によれば、失敗を恐れなかったからではないだろうか。もっと即物的に言えば、手続きや形式や成果のことなどあまり考えずに、面白がってやっていたからではないだろうか。しかしながら、やがて失敗は許されなくなる。きちんと手続きを踏んで研究会を運営し成果報告書を作成しなければならなくなる。「制度化」とはそういうものである。

制度化は必要なものである。不可避的でもある。ただし、何らかの陥穽も伴う。その陥穽に陥らないよう、新しい仕掛けや装置が工夫される必要がある。日文研以外の研究者が主宰する共同研究を公募するようになったのも、おそらくそのためであったのではないかと思われる。小松和彦所長が提案している国際共同研究も、そうした新しい仕掛け、装置になるだろう。そして、新しい仕掛けや装置を工夫するとき、言い換えれば制度設計をやり直すとき、あらためて日文研の共同研究はどこに独自性があるのか、何のための共同研究会なのかを確認する必要があるだろう。

外国人研究員の仕組みも考えなければならない。グローバルな日本研究の発展のため、海外から日本研究者を年間一五人ほど募集し、給与や研究費等については専任教員とほとんど同じ

条件で、一年間自由に研究に専念してもらう、というこの仕組みは、まことに素晴らしい。外国人研究員は、日文研所蔵の文献や資料を活用して自分の個人研究を深めるだけでなく、多くの日文研共同研究に積極的に参加し、それ以外にも日本在住の研究者と学術交流を図り、帰国後は自国あるいは自国を含む地域での日本研究の基礎づくりに尽力したり、日本学の発展・活性化に努めたりしてきた。日文研の外国人研究員が日本研究のグローバル化に果たした役割は大きなものがあると言ってよい。また、日文研を日本研究の国際的拠点たらしめることにも大きな貢献を果たしてきた。

このように、外国人研究員という仕組み、仕掛けは、日文研にとっても、採用される外国人研究者にとっても、まことに素晴らしく魅力的である。ただし、素晴らしい仕組みであるからといって、善用されるとは限らない。いやむしろ、素晴らしい仕組みであるだけに、善用されるとは限らない。この仕組みが本来の趣旨・目的とは異なる方向に使われる危険性がないとは言えない。しかし他方、そうしたきわめて稀な、趣旨に反した事例の発生を憂慮して下手に防止策を講じると、角を矯めて牛を殺すことになりかねない。ここにも制度化の陥穽がある。

外国人研究員の仕組みに関しては、特にその選考方法について、いま見直しがなされつつある。選考方法以外にも、仕組み本来の趣旨を生かし、制度化の落とし穴に陥らないような工夫がなされなければなるまい。

初代所長の梅原猛氏によれば、日文研の教員は一人一人が「羅漢」でなければならないという。たしかに草創期の顔ぶれを見ると、各人が羅漢であったことは疑いない。羅漢たちが集った時代、ある意味で牧歌的な時代には、制度化は不要であった。規則など決められていなくても、羅漢たちは彼らの「常識」に照らして柔軟に対応した。規則にないものでも、趣旨に合致

すれば、どしどし実行に移した。と同時に、趣旨に反するものは、規則で禁止されていなくても、容赦なく排除した。

ところが、必ずしも「羅漢」ではない者もやがて日文研の一員に加えられることになる。さしずめ私などがその典型である（「羅漢」になりたい、と努めてはいるのだが）。「羅漢」になりきれない者が増えてくると、どうしても制度化を図らざるを得ない。制度化はものごとの標準化と形式化を促し、手続きなど様々なことが窮屈になる。それと同時に、規則で明確に禁止されていなければ、日文研本来の趣旨に反していても、言わば制度の間隙を突かれたかたちとなって、それを容認してしまう場合もある。制度化の恐ろしさは、ここにある。

とは言っても、日文研のこれまでの歩みは、『新・日本学誕生―国際日本文化研究センターの25年』に描かれているように、成功の物語であった。制度化の陥穽をあまり意識せず、にもかかわらずそこに陥らずに着々と実績を挙げてきた。その点ではサクセス・ストーリーである。一九八〇年代以降の日本の政治・経済の変化をうまく乗り切ってきたとも言えよう。

だが、それ自体が問題かもしれない。日文研発足の数年前、私が参加したまったくの手弁当の共同研究の成果（『失敗の本質』）は、有難いことにいまだに読み継がれているが、そこで提示した仮説は、「過剰適応は適応能力を閉め出す」ということであった。つまり、環境に適応しすぎると、新たな環境変化には適応できない、ということであり、言い換えると、成功体験は次の成功の可能性を妨げる、とも言えよう。成功は失敗のもとでもある．日文研のこれまでの歩みがサクセス・ストーリーであるとするならば、今後のためにはこの点を踏まえることも必要だろう。いまが「転換期」だという認識は、それゆえに重要なのである。

私は、日本研究の現状がどうなっているか、どうあるべきか、といったことに、あまり関心

はない。そもそもそれを論じる任ではない。日本研究の消長は、研究それ自体の中身や水準ではなく、日本国家の国力ないし存在感と相関しているように思われる。そうであるならば、研究の水準ではなく、その関心に陰りが見えるからといって、日文研が憂慮すべき筋合いではない。本来の理念を噛み締めて、理念実現のための仕掛けや装置の見直しを黙々と続けるだけである。梅原氏は、内外の研究者が「ゆったりした気持ちで自由に研究、討議できる」場を設けることが日本の安全保障にもつながる、と語っている（中曽根康弘・梅原猛『政治と哲学―日本人の新たなる使命を求めて―』ＰＨＰ研究所）。「安全保障」は言いすぎかもしれないが、少なくとも国益につながることは間違いない。実際、それができさえすれば、充分ではないだろうか。

九人の退職者に代わって、やがて新しい「羅漢」たちが日文研に加わる。彼らが新鮮な発想をもたらし、それがこれまでの実績や伝統に加味されて、そこから、さすが日文研と唸らせる面白い仕組みや仕掛けが生まれてくることに期待しよう。

（国際日本文化研究センター教授）

文明は文字だけではない——世界に通じる日文研へ

ウィーベ・カウテルト

二〇数年前に私は研究員として、国際日本文化研究センターに一年間所属していた。それは丁度洛西センターにあった仮の研究所から現在の建物に移る時期でもあった。仮の日文研の下にはショッピング・センターがあり、ビールとおつまみを買ってきてセンターの仲間とゆっくりお喋りする晩が多かった。設立直後の生き生きとした、将来に向かった動きを感じるのが毎日の現実であった。『新・日本学誕生—国際日本文化研究センターの25年』からもその設立当時の理念が読み取れる。つまり、保守的な学術や封建的な学会を基礎としたアカデミズムの流れに一石を投じて、学際的に研究を行う。日本が誰にも理解出来るはずもない国と民族であれば学術的な発展も望むべくもなかろうが、特別な国と民族ではない、世界の一つであるために外国の研究者は欠かせない。「国立」研究所ではあるが「国際」、外国で日本文化を研究する人を積極的に受け入れる。蛸壺、井の中の蛙という研究姿勢ではなく、世界に通じる知識を生産する。研究成果を出せるような方法として共同研究を制度的に導入する。共同研究は分野、領域を超えて、科学と人文の有機的な結びつき、総合的、学際的、国際的な研究姿勢を取る。いかにも有効なやり方であり、間違いなく結果を出せ、確かに日文研の動力でもあると同様に、日本と日本人は大分世界に通じる国や民族になったのではないだろうか。

日文研は「バブル期」に設立された機関でもある。建物をみるとその贅沢な時代の面影が

しっかり残っていて、様々な種類や色の御影石の階段から建物に上がる。コモンルームの庭にあるテラスにはデザインされた壷の彫刻が左右に置かれており、公共のオフィスビルとは思われないほどデザインに凝った景色がみられる。経済面の贅沢とともに精神面も大らかで、立派な理想を生んだとも言えるだろう。若かった日文研は時代とともに熟成し、設立当時の理想からもむろん変化があったに違いない。

振り返ってみると、バブル期の物質的贅沢や思想の大らかさは批判できないこともない。この様な批判は設立当時にもあったにもかかわらず、日文研は徐々に権威と信用を高めながら、手に入れた贅沢すぎる研究所への批判も乗り超えた。しかしバブル期を越えた日本は緩やかな（マイナス）成長の時代に入り込んだ。財政縮小が将来の現実になり、高齢化社会とともにこれからの何十年間の縮小や圧迫の時代は間違いなく近づいてくる。精神的には、大らかというよりも恐怖感、未来に対しての見通しが暗くなるのが当たり前の風潮になってくる。将来が見えにくくなれば、人間は心理として心配第一になり、慣れ親しんだ範囲の安全な世界観にもどる。研究者は革新的な創造活動をするよりも安全な道にとどまり、ただ確実な資料やデータの整理に引き込もる。つまり、蛙が井戸に、蛸が壷にこもるような姿勢になる。

一〇年後の日文研について何か書いてくれないかとの依頼を受け、私なりに思いつく事をあげてみた。日文研は設立当時の理想の上に立ち上がっており、将来に向かっても根本的に同じ路線で考えれば良いのではと思う。設立当時の大らかさを伸ばして未来の方針として開拓するのは理想と現実のぶつかり合いから分析できよう。現実に今日の文明には色々な問題がある。それに向かって理想の力を得、問題の中に研究し論争する現場を見つけだす。たとえば、資源争いと地球温暖化は現実的な文明滅亡へのテーマである。私の専門ではないにしても、世界人

口は安価な石油と無限の資源という空想での経済成長を遂げたが、無限と思われた資源は無限ではなく、経済成長や人口増加にも限りがあり、バブルは何億年もの人類進化から言えば、短期間の薄っぺらな現象にすぎない。今のような生活水準を全世界人口の一人一人が達成できるはずもない。一人の人間が生命維持のために使える資源量が減少する時期が始まり、生活水準が生存レベル以下に下がる地方が増える。京都が憧れの場所としてしばらく栄え続けているにもかかわらず、もっと離れた地方、あるいは開発途上国は将来寂れていくしかない。寂れる所に対して栄える所の「栄え」も不安定になり、いつか、なにかの形でバランスが崩れる可能性も否定できない。その時にどれほど革命的な変化が起こるのか、それとも緩やかなスライドになるのかは分らない。資源の食い荒らしにともなう地球温暖化は政治家の責任よりも大きな世界の動きになり、誰の力でもくい止める事はできなくなりつつあると云われている。その不安と問題の中で日本文化の研究はそれに先立って、目を開けて文化への影響を意識し、理解し、創造性を持つべきであり、未来への責任は日文研にも託されていると思う。

私個人の考えで研究方針について言わせてもらえば、物理的に測る事が出来る日本の「環境」に対しての意識や策略を重視すれば良いのではないだろうか。自然哲学者が指摘するように、今の文明はなんらかの形と方向で「環境」と仲良く進む必要がある。「環境」の自然科学的理解はかなり進んだが、「人文」の領域での環境意識は低すぎるように思えてならない。あるいは別の言い方をすると、自然科学でも、人文科学でも、無責任にそれぞれの「純粋」な道だけを歩むようになった。それは今やありえない時代になった。人文学の研究活動において「自然科学」の分野をしっかりと把握、理解し、「人文」領域の資料の一つとして、自然科学を取り入れるのは大切な事だと思う。その実践的作業は最近だいぶ簡単になり、あらゆるデータ

がウェブで検索できる。分析と判断は歴史的資料や文学的資料などと同じ学術的方法で出来る。理科系、物理学のデータは人文系の研究者にでも簡単に活かせる研究成果になってきた。情報社会がその豊かさを持ち込んでくれた。ＧＩＳのデータは歴史のデータと合わせて新たな研究ができるし、将来に向けてのモデル作りも可能である。人文科学と自然科学との境界線を打ち壊して文明の総合図を示す責任が日文研にあると思う。発掘学とＧＩＳの研究は当然として、人文学の中でもそれぞれの領域の境界線が消える傾向は日文研に既にある。つまり、日本史・人類学・文学、それぞれの専門発表に色々な分野が重なり合い、新たな結論が導き出せるようになる。これはいかにも日文研らしい研究のように思う。私の研究テーマである都市文化から言わせてもらえば、都市形成は人類の歴史や文化を、ただ「人文」の資料のみから分析するだけでは足りないように思う。「自然科学」の地理を含め、相互関係の分析によりまた新たな都市計画環境戦略を開拓できる。別の例を挙げると、私の「日本庭園」研究も、歴史、美学や社会学的な見方から出発し「環境論」のなかに場を変えて「日本庭園」を組み直すという研究論である。結果的に「日本庭園」からは環境問題に対してまた新たな教示を得られる事によって、環境や社会変化の中における「庭園文化」の新たな意味を開拓することができる。この取り組みは近いうちに本として出版する予定で、その研究方針を実践したものの一つである。

　現在、日本のもう一つの文明問題は高齢化社会の進展である。高齢化とともに時間の感覚が変わる。現実は暗く、将来は見難くなってくる。逆に過去ははっきりと見え、老人は昔懐かしい事を思い出しながら死に向かって行く。「現実」と「将来」を把握することはもちろん日本文化にとって望ましい方向であり、未来と将来、イマジネーションをテーマにする方針を共同

研究において重視する。「歴史」を研究するにも、むろん「将来の歴史」テーマを見抜くことが価値ある結果になるだろう。私の分野からいうと、たとえば「植民地満州の都市計画の理想家たち」や「万国博覧会の歴史的将来像」が必要な研究テーマである。もちろん高齢化に悩まない国々は将来に向かう力を自然に握っている。その「若い国」の将来を意識する研究も迫力があるに違いない。

資源争いとともに貧富の差も激しくなる、国内にも国外にも財力を持つほうが有利であり、さらに手に入れるため格差が大きくなる一方である。その文明の方向性から見ると日文研の研究方針がどう変わるか、あるいはどのようなスタンスを取るのか。私はその専門家ではないので、まず常識的に考えると、国民に対して「先生」というエリートは自分の存在権を確保するかどうか。尊敬され、信頼できるセンターでなければ、生き残る価値もない。尊敬と信頼は「しっかりした研究」を基礎にしたアピールする発言から得られる。研究は根本的にいえば資料や情報の上での作業である。図書館や情報部がそのための基礎的な作業を提供しているにもかかわらず、研究者がしっかり分析と判断するための情報や資料を把握していないと研究者としての信頼を得られることもない。「羅漢」の気分だけで「面白い」事をするのでは不十分である。面白いテーマはマスコミに取り上げられやすいし、大衆は喜ぶのだが、あくまでも「面白さ」は作戦上だけで、研究の質とテーマの内容は別のレベルが求められる。日文研のバブル期から現在までスターを出さないと注目を引かない時期があった。もちろんスターはある意味で大事な存在であるが今後はオピニオン・リーダーに代わる傾向がみられる。オピニオン・リーダーは文化を研究する日文研の中から出て、国民の目を引く重要な文化的テーマを紹介する。そういうリーダーになろうと思えば、皆が興味あるテーマに対してオピニオンを出さない

とリーダーにはなれない。あるいは、もっと卓越した話、つまり皆が考えもつかなかったテーマを上手に見つけて開拓するのもいいだろう。今の時代、研究者にとっては恵まれているほどのテーマが眠っている。資源減少、高齢化社会、貧富の差が激しくなるにつれ、日文研と所属する研究者の権威と信頼をもっとしっかりと維持する必要が出てくるのと共に、日文研の文明に対してのリーダー的な役割をさらに期待できるのではないだろうか。

日文研はこの二六年の間にもしっかりと地域意識を定着させてきた。桂坂および京都市民達とのかかわりは相互通行の働きとして意識され、地域側の支えと日文研側から地域への参加はお互いの関係を持続的に維持できるだろう。「出前授業」の形で桂坂小学校で講義するのはすばらしい発想であり、近所の子供に紙芝居を上演するのもとても賞賛すべき事である。中学校についてはその余裕がないと耳に入ったが、桂坂中学校にも別の形で、年一回、社会学の出前授業をやってもいいのではないだろうか？　ハートピアでのフォーラムも同じ様な意味でおおいに役立っていると思う。外国人の研究員が京都市民の前で学術的な講演を行うのか、あるいは市民が喜ぶような話をするのか、どちらにしても、お互いの関係を維持する結果になるように思われる。日文研の偉い先生方が象牙の塔から降りて、コメンテータとして市民の前に出ることにもなる。それを考えると、フォーラムのスピーカーとコメンテータという立場を抜きにして、互いに平等な立場で同じテーマについて小さい講義や議論を行う形の方が効果的ではないだろうか？　この小さな疑問は別として、出前授業とフォーラムは地域レベルで相互のギャップを埋める有効な対策にもなっているように思う。一〇年間のこれから先マイナス成長後、今豊かに見える桂坂も雰囲気が変わるだろう。どんな荒波があろうとも地域とのギャップを出来るだけ小さく維持するのも大切な事である。

地域だけでなく、国同士でも貧富の差が激しくなる。日本人の一人当たりのエコ・フットプリントはインド人の約五倍、インドの人口は日本の約一〇倍程である。その事実を考えると日本の文化研究はどうなるのか？　ここからもまた資源をもっとフェアーに分けないといけないという意識に繋がる。インド等の文明力・文化力が大きく、エコ・フットプリントが小さい国々の研究者を積極的に日文研に招聘して「文化の力」を研究し、学びの重点を置く。「経済の力」は間違った力であり、批判する必要が当然そこからも生まれてくる。経済力や、経済成長を批判するのは政治的な発言に見えるかもしれないが、実は今の時点では文明と資源の簡単な計算だけの話で、現実には文明・文化研究が一番大きなテーマではないかと私は考える。

日文研は皆の税金で運営されているともいえるから、その国益はどこにあるのかとの疑問もこれから変わるのではないだろうか。そもそも「国」とはなにか「益」とはなにか。若い学生に尖閣諸島の問題を聞いてみると「あ、あれは国の問題でしょう」、「政治家の下手なパフォーマンス」等との返事が返ってくる。その学生にとっては「私の問題じゃない」との事である。すると「国」イコール「東京の政治とその金を振り分ける権力」にあたる。その若い学生が将来の社会を代表するのであれば、これからの「国」は「日本文化」より小さい存在が現実になりうる。日文研の研究者たちはもちろん権威ある信頼できる研究者でありながら、薄い存在になった「国」よりも「日本文化」に対して責任を持つのは当然である。「国」の言う通りにする必要はなく、正直に事実を言うことの方が優先だろう。「国」のための「益」は研究者の独立判断で、文化の益にもなりうる。そのための努力はエリートである研究者の責任につながる権威でもあるだろう。

日本人には「時間」、「空間」、「自然」、「物」や「人間」を細かく観察し、言葉や芸術で微妙

に表現する豊かな能力がある。私が外国人として日本文化を研究するのはその楽しみと重要性のためであり、自分の世界観はこれらによって広くなった。世界文化から見ても日本にその価値はあるのかと他の研究者からも聞かれるが、それぞれ自分が育てられた国が世界一というのは誰にでも共通している。もちろん日本人が細かく見るのは、まず日本国内の世界、世界に限りのある日本だけの文化である。その日本文化の研究を外国人に理解させるのも日文研の設立当時の声であった。人に事を理解させるのは根本的にいえば大人同士というよりも親が子供にさせる事であって、ただ単に外国人に日本の文化研究を理解させるのは一方的なプロパガンダにすぎない。下手をすると日本はまた、誰にも理解できない特別な文化を持つ民族と国になる。相手になにかを理解させようと思えば、まず相手を理解しないと、きちんとしたコミュニケーションにはならないだろう。世界に通じる為の日本文化研究の基礎は世界を理解することである。世界の学者の多くは自国語以外のいくつかの言語、たとえば中国語、英語、ロシア語などで日本の文化を研究する。それは「間違い」とは云えないだろうし、日本人研究者の行う日本文化の研究とは「違う」観点からの研究にあたる。場合によってはその違う観点とは用語と方法論にあり、日本国内のみの研究内容よりも優れた結果を出す場合も十分にありうるだろう。国際的に、世界に通じる研究のやり方、用語、方法論、パラダイムなどを把握しないと日本文化研究は辺鄙な島国のわけの分からない人たちの、日本以外には誰にも読まれない本に終わってしまう。私の専門とする分野では論議に参加するのは「外国人」ばかりで、日本人は発表はしても論議となると顔がほぼ見当たらないのが現状である。日本文化研究を世界の人達と同じやり方で行うならば、発表のみではなく、論議のパートナーとしての一員になり、国際会議のスピーカーとして今以上に参加する。その上で、本当の意味での相互理解が生まれてく

る。今の文明問題は地球全体におよぶ問題である。日本文化研究も世界に通じる様な研究を進める必要がある。日本全国を考えると日本の文化について、唯一「国際」研究を行えるのは桂坂の日文研しかないといわれる様に、特殊で独自の重責ある活躍の場であり、もっともっと世界に通じ、益々世界から尊敬される日文研になって欲しいと望んでいる。

（ソウル国立大学准教授／日文研外国人研究員）

国民文化研究と文明論的転移

酒井直樹

（一）戦後国民文化論の前史

「近代とは何か」については多様な理解があり、必ずしも簡単な定義が受けられているわけではありません。しかし、全地球的な世界像が始めて成立した時期のことを近代の端緒とする見解は広く受け容れられているのではないでしょうか。ヨーロッパ人によるアメリカの発見と、それまでにはなかった新しい形式の政治的正統性の出現を近代世界の特徴として考える論者は少なくありません。近代は始めて「ヨーロッパ」と呼ばれる、普遍主義的な神政的権威なしに政体が併存する地域が可能になった時代であり、そのヨーロッパが「アメリカ」（America）と自らを対比しつつ自己画定するようになります。「アメリカ」の発見が一五世紀末の出来事

であり、宗教改革期の長期にわたる血みどろな内戦を経て、普遍主義的な権威の支配を打倒して領土的国家主権体制が「ヨーロッパ」にでき上がって来るのが一六世紀・一七世紀です。やがて、この「ヨーロッパ」は「アメリカ」だけでなく、「アジア」や「アフリカ」と自己を対比しつつ自己画定し始めます。そして、一八世紀になると、国家主権はその正統性の根拠を「国民」あるいは「民族」といった新種の共同体に求め始め、国民国家主権体制が現出することになるのです。

「ヨーロッパ」は、何よりもまず、世界的な国際秩序の名であり、近代の国際世界は「ヨーロッパ」を中心として成立することになります。「ヨーロッパ」とヨーロッパ以外の「アメリカ」や「アジア」の関係は、このヨーロッパにおける政治的な正統性の在り方と対比して規定されるようになります。そこで、「ヨーロッパ」とヨーロッパ以外の地域との関係を、通常私たちは「近代的植民地主義」と呼んでいます。古代から、地中海周辺にも東アジアにも植民地は存在していましたから、植民地統治そのものはとくに近代的な概念とはいえませんが、「近代植民地主義」は明らかに、植民地経営あるいは統治一般とは異なっていました。というのは、「ヨーロッパ」は国際法（Jus Publicum Europaeum）によって限定された領土的国家主権の併存する地域であり、紛いなりにも、そこには各国家と他の主権国家との間の相互承認の体系が存在していて、各国家の主権は尊重され、主権下にある臣民の権利は擁護されるという建前が成立することになるからです。やがて、基本的人権の名の下に普遍的に承認され、領土を越えて承認されることになるこれらの権利は、ヨーロッパのひとつの領土的主権国家の臣民に対してだけでなく、他の主権国家の臣民に対しても承認されることになるのです。今日でも、私たちが国際旅行するときには必ず携帯する旅券には、例えば、主権国家である日本政府が他の

政府に対して日本国民である旅券携帯者の権利を擁護することを要請する旨が、その第一頁に表明されています。

一九世紀に領土的国家主権が、「ヨーロッパ」以外の、日本のような、国家にまで波及する以前（明治維新は、それ以前の幕藩体制の政治的正統性を領土と国民を正統性の根拠とする領土的主権国家へと切り替える革命的な変化の始まりことでした）には、非ヨーロッパ人は人権の外におかれていました。あるいは、ヨーロッパの主権国家は他のヨーロッパの主権国家に対してはその国民の権利を擁護する義務を負っていたのに対して、ヨーロッパ以外の国家の臣民の者の基本的人権を尊重する義務を負っていませんでした。したがって、そのような住民（非ヨーロッパ社会の住民はしばしば「原住民」と呼ばれてきました）に対しては、国際法の制約を受けずに自由に軍事的な暴力を使うことができたのです。今日も合州国政府はアフガニスタンやパキスタンで住民を遠隔操作された小型飛行機を使って、ほぼ自由に殺戮していますが、殺人罪に問われる者は合州国政府にはいません。日本の場合も、戦前は、中国で大量の非戦闘員を殺害しましたが、この殺人の責任で日本国家の総覧者であった天皇が逮捕され処刑されるということはありませんでした。今日私たちは、近代的植民地主義というと植民地的な暴力を連想することが多いわけですが、この連想にはこのような歴史的な由来があったのでした。

このようにして、近代の国際世界では、自らを領土的国家主権として自己構成することに失敗した住民は、植民地主義の暴力に曝されることが全世界的な常識となります。したがって、一九世紀・二〇世紀になるとアメリカ、アジア、そしてアフリカで植民地主義の暴力に曝された住民たちは反植民地主義闘争を組織し、領土的国民国家主権を樹立する運動を展開するようになるのです。

二〇世紀前半の段階で、植民地をもつ国民国家（イギリス、フランス、合州国、日本、オランダなど）にとって、このような反植民地主義国民主義にいかに対処するかが、国家運営の中心課題の一つとなってきます。トランス・パシフィク（太平洋横断地域）において植民地帝国の間の競争が激化する一九三〇年代から一九四五年のアジア・太平洋戦争の終焉の時期には、太平洋をめぐって対峙したアメリカ合州国と日本帝国の二大帝国的国民主義は、いかにして自らの植民地主義を否認しつつ、相手の植民地主義を弾劾するべきかを模索しつつ、国家統合原理をめぐる抗争を繰り広げていました。日本国家は、合州国を白人至上主義を国是としたヨーロッパの列強の延長にある白人帝国と位置付け、近代的植民地主義からアジアを解放しようとする反植民地主義者の役割を担おうとします。もちろん、白人至上人種政策を掲げるドイツとイタリアと同盟を結ぶことで簡単にその馬脚を現してしまうわけですが、真珠湾攻撃の前後の史料が示しているように（例えば、若きエドウィン・O・ライシャワーの『日本政策に関する覚書』。この覚書の日本語訳は拙著『希望と憲法』［以文社、二〇〇八年刊］の末尾の参考文献として掲載されているので、興味のある方は参照して下さい）日本のプロパガンダ攻勢に合州国の指導者層は脅威を感じていたことが判っています。一方、日本でも朝鮮や台湾、そして中国における反植民地主義民族主義には政策決定者は恐怖を感じており、「皇民化政策」によって併合地域の民族主義をどうにかして取り込もうとします。戦前の日本で民族主義が弾圧されたのは普遍主義的な多民族統合の原理と民族主義が真っ向から矛盾してしまうためでした。ヨーロッパ戦線とは違って太平洋戦線では、いかにして植民地主義を否認するかが両帝国の建前となってきます。

（二）日本帝国崩壊後の展開

日本帝国の崩壊とともに、日本の知識人は普遍主義的な多民族統合の原理を捨てその正反対に向かうことになります。敗戦以前の、民族主義や人種主義批判に携っていた学者、知識人や官僚が一気に特殊主義的な民族主義に転向することが起こります。日本本土に戸籍をもっていた住民に限っていえば、国民国家としての日本は植民地宗主国からアメリカ合州国（および連合国）の植民地へと一気にその立場が変換したからです。多民族統合を主張し民族主義に反対していた知識人が失墜し、そのかわり和辻哲郎のような民族純血主義者が脚光を浴びるようになります。日本の知識人の発話の立場が、植民地支配者から原住民のそれへと切り替わったのです。もちろんここで、この変換が植民地被支配の厳しい経験をふまえて行なわれたかどうかは充分に検討しておく必要があるでしょう。というのは、このような変換は、それまでの東アジアの反植民地主義知識人の民族主義をいわば盗み取るように行なわれたと考えざるを得ないからです。

合州国政府は既に日米開戦直後から日本占領のための政策を研究していましたが、日本占領政策の中心は天皇制で、先に引いた『日本政策に関する覚書』に明確に書かれているように、日本占領を成功させるために天皇裕仁を利用することを考えていました。この目的を成就するためには天皇には戦争責任がないことにし、すでに太平洋戦争中から、東条英機らの軍国主義者に合州国国民の敵意を向けさせ裕仁から逸らすように画策しています。天皇制温存政策は、日米両帝国がかかわっていた近代植民地主義の否認の具体策であることを看過することはできないでしょう。つまり、合州国は近代植民地主義体制を温存しつつ、しかし、植民地主義に反対する民族主義運動を表立って弾圧することを避けようとしているのです。典型的な近代的な

植民地宗主国として行動することを合州国はできるだけ避けます。したがって、戦後は戦勝国であるイギリスやフランスが植民地を回復しようとする動きに対して一貫して冷淡でした。むしろ、独立を目指すアジアの民族主義を肯定しつつその民族主義を上手に管理する方向を追求したのです。即ち、それまで植民地支配を受けていた住民の領土的国民国家主権を擁護する体制としてパックス・アメリカーナ（アメリカ支配下の平和）を打ち立てようとしました。日本帝国がアジアを植民地主義から解放する指導者としてそのヘゲモニーを模索したように、第二次世界大戦後の世界で合州国は反植民地主義の看板を掲げることになったのです。ここには、国家主権の根本的な再定義があることを見逃すことはできません。しかし、実質的な植民地支配を手放したわけではありません。このような歴史的文脈において、天皇制を温存することは、日本の国民主義を、合州国の東アジア支配の手段として組み直す作業の一環だったのです。戦後日本の保守勢力が掲げる国民主義はパックス・アメリカーナの小道具にすぎず、この事態は現在にいたるまで変わってはいません。戦後日本の国民主義は、合州国の帝国支配体制の手段にすぎないのです。

第一次世界大戦は、それまでかろうじて維持されてきた国際法の秩序が崩壊し、ヨーロッパ中心世界の危機を告げる大事件でした。国際法の秩序を再建するために、国際連盟が樹立されましたが第二次世界大戦によってもろくも崩れ去ります。そこで一九四二年に発案されたのが国際連合で、それまで主にヨーロッパと北アメリカに限られていた国際世界は第二次大戦後全世界に広げられることになります。国際秩序の中心が「ヨーロッパ」から「西洋」に移ったといってよいでしょう。一九世紀に中華中心世界像が崩壊して以来、東アジアではヨーロッパも「西洋」と呼んでいたので、ヨーロッパから西洋への中心の移動のもつ意味がよくみえなかっ

たのですが、世界の中心の移行は合州国を中心とした世界の出現と国際秩序の到来を表わしています。もちろん、国際連合ができたからといって、世界中の近代的な植民地主義体制が消滅したわけではありません。

連合国による日本占領が続いている間に東アジアには大きな変化が起こります。中華人民共和国が成立し朝鮮半島では朝鮮戦争が勃発します。全世界的にも、合州国による一極支配は、冷戦によって制約されることになります。日本占領についても一九四〇年代末から一九五〇年代にかけていわゆる「逆コース」が起こり、合州国の政策決定者は日本の戦後憲法推進から憲法改正へとその方針を転換することになります。それに伴い、それまで戦争犯罪人として国民政治から排除されていた岸信介や正力松太郎、笹川良一、児玉誉士夫などが、合州国の利害を担う黒幕として復帰することになります。しかし合州国の中央諜報局（ＣＩＡ）の息のかかった岸らの工作者の跋扈だけでなく、日本政府の官僚制や経済界の人脈が、戦後の合州国の植民地支配体制に沿うかたちで再編されてくるのです。もちろん、ここでいう植民地主義体制は、英植民地帝国や戦前の日本の朝鮮支配や台湾支配のようなものとは明らかに異なっています。そこには、新たな国家主権の在り方があり、旧来の国家主権の定義から見れば日本は独立しているようにみえます。しかし、一九五二年の日本占領の終焉を「主権回復」と安倍政権が呼ぶことが滑稽であるように、この国家主権を一九世紀の古典的な意味での独立した国家の主権とみなすことは馬鹿げています。

そこで、戦後日本の思想状況は、この歴史的な変遷を象徴的に反映しているといってよいでしょう。

（三）国民文化研究と植民地体制

合州国においては学問としての日本研究は、太平洋戦争中に、諜報活動の一環である敵国研究として始まりました。現在、世界中に日本研究に携わる研究者がいますが、やはり、日本以外の国で一番多くの日本研究者がいるのはアメリカ合州国でしょう。典型的な「地域研究」として一九五〇年代から一九八〇年代にかけて急速に発展した日本研究は、地域研究という熟語が示す通り「地域」を学問的な統合の原理としていて、高等教育機関（大学及び大学院）において広く制度化されています。日本研究は日本という「地域」を研究する学問分野であり、この学問分野を専門とする者は一般に「日本研究者」と呼ばれています。地域研究にはこのほかに、ラテン・アメリカ研究、ソ連研究、アフリカ研究、中国研究、中東研究、東南アジア研究などがあり、これらの地域はある極性に基づいて選択されています。地域は「西洋」の対極にあるものとして認知されて、地域研究の対象となりうることが、ある社会や文化が「非・西洋」あるいは「残余」（the Rest）に属することの証しとなるのです。すなわち、地域研究は地域についての専門的な知識を生み出すだけでなく、陰画として「西洋」の自己画定のための知識を生産するといってよいでしょう。合州国が「新世界」から「西洋」の中心に躍り出た時期に「地域研究」も合州国の大学で制度として成立することになったのです。

ただし、地域研究を、学問分野として存在している社会学や哲学、経済学、心理学などと同列に存在する学問分類系に属するものと考えることはできません。地域研究はそれまでの学問分類とは異なった原理によって分類されていて、旧来の意味の学問分野と二重に併存することができるのは、このためです。そこで、地域研究には社会学者、歴史家、言語学者、経済学者、文学研究者などが学問分野の違いを越えて帰属することができることになります。つま

り、地域研究は学際的な学問のあり方を可能にしました。そこで、学際的な学問編成を支えるために、異なった学問分野に帰属する専門家が共有する能力としての地域言語が重要な意味をもつことになり、地域研究は言語教育を軸に制度化されることになります。地域研究が言語教育を基軸にして成立している制度的現実を反映しているためでしょうか、地域研究は、しばしば、「地域」をある民族言語や国語を均質に共有する文化の単位として看做す偏執に捉えられています。その典型的な形態が国民性研究と呼ばれる、初期の地域研究の支配的な潮流です。地域研究に先行して存在した人類学や民族学、アフリカ・東洋研究、南洋研究などのいわゆる未開社会の研究では、共同体内に均質に普及した文化を想定することが広くおこなわれ、文化の統合体が言語のそれと取り違えて理解されてしまうことがしばしばあり、共同体、文化、言語がその統合性の点で混同して想定されることがあったからです。例えば、日本民族が日本文化を共通にもち、日本語がその共通性の証しとして依拠されるといった論理が、昭和期だけではなく明治以前の時代の日本列島についても用いられることになります。このような明らかな混同が放置されたのは、観察者である人類学者や民族学者と観察対象である原住民共同体のあいだの想像的な関係によることが多いのです。と同時に、地域研究はその土地の国民主義と共犯性を結びます。この共犯性こそ近代の植民地主義関係に他なりません。

国民性研究の代表作と呼ばれる『菊と刀』が日本に紹介されたときに、幾人かの日本の知識人が感情的な反発を示したことはよく知られています。著者ルース・ベネディクトの日本人についての観察や分析を反駁することを意図して書かれた彼らの議論は、やがて国民性研究の言説を再生産することに大いに寄与します。一九六〇年代から一九七〇年代に繁盛した日本人論は、まさに国民性研究にかかわる文明論的な転移であり、植民地主義関係の共犯性を典型的に

表しているといってよいでしょう。

転移とは精神分析において、患者が分析者にむかって、別の人物—例えば幼児期に権威をもっていた父や母—に対してもっている無意識の願望を投影することと考えられることがあります。私がとくにここで問題としているのは、精神分析における患者と分析者の対面的な関係で起こる現象ではなく、日本文化を論ずる者が、読者あるいは聴衆に、権威の源泉としての「西洋」を投影して、あたかも、相手が「西洋人」であるかのように、弁明したり告訴したりしてしまうことをいいます。明らかに読者の大部分がいわゆる西洋人ではないのに、日本文化をある均質な実体と想定した上で、そのような日本文化がいかに西洋文化と異なっているかをあたかも「西洋人」であるかのように想定された読者に向かって面々と述べ続ける日本人論は、「文明論的転移」の特徴を見事に示しているといってよいでしょう。その結果として、西洋人の視座から見られた日本文化なるものを綿々と語り続けることになるのです。じつは合州国で行われた国民性研究そのものにすでにこの転移（いわば分析者の側の転移というべきでしょうか）が作動している点を見逃すことはできないのですが、日本文化論はいわば「父」である西洋（戦後は、しばしばこの西洋は合州国と同一視されてしまう）あるいは「父」を象徴する人物への弁明あるいは反駁の形で語り出されてしまうのです。日本人論に代表される日本文化論を動機づけるのは、「西洋人によって認知されたい」という願望です。その結果、日本文化は常に「西洋文明」への比較によって語られてしまいます。しかし、普遍的な参照項とされる「西洋」なるものは何処にあるかも、そこで前提とされている「西洋文明」の経験的な内実はどのようなものか、といった事項は不問に付されたままです。西洋とは、文明論的転移における「父」なる者の位階以外の何者でもなく、世界地図の上で同定できる場所でもなければ

名指しすることのできる社会集団でもなく、抽象的な語りの立場に過ぎません。日本文化論の論者は「日本人として誇りをもちたい」という欲望をもっている訳ですが、日本人の誇りへの欲望は「西洋人に認知されたい」という従属への願望とじつは同じものなのです。

近代に現われた民族・国民国家では、さきに述べたように、国民共同体内に均等に普及した国民文化と国民全てが話す国語が重なりあうものとして想定されることがしばしば起こります。国民国家では、国民文化そして国語が共有されるのが当然であると考えられていますが、この規範的な建前が経験的な現実としばしば混同されるのです。国民国家特有の空想が非西洋社会やいわゆる伝統社会に投影されたとき、地域をある国語を均質に共有する文化の単位として看做す偏執が結果することは容易に想像できます。合州国の地域研究者は、日本や中国に、この空想された民族文化を投影します。そして、このように投射された知は、地域の、つまり日本や中国の、国民主義の要請にぴったり呼応してしまうのです。つまり、地域研究によって押し付けられた知は、知の対象となった原住民にとっての自らを国民として構成したいという欲望に対応してしまうのです。このような、植民地関係における植民地支配側の知識人と被植民地支配側の知識人の間の奇妙な共犯性のことを、私は「文明論的転移」と呼んできたのです。

(四) パックス・アメリカーナの終焉

一九世紀にあったようなヨーロッパと非ヨーロッパ世界の間の明確な差別に根拠を求めるヨーロッパ中心の国際法は最早不可能です。しかし、知の生産における文明論的な転移の構造としてヨーロッパ中心性は未だに維持されています。そこでは、絶えず「西洋」なるものを参照項としつつ国民文化の知識を再生産する言説が維持されています。

日本を近代化の優等生とみる「近代化論」が地域研究を席捲したのは、冷戦が全世界を覆う既成事実として成立する、日本では一九五五年体制ができ上がる時期でした。近代化論が日本を近代化の見本として称揚した背景には冷戦の現実がありました。日本占領のために天皇を利用することを戦争中に提言するなど、天皇制温存の推進役であったエドウィン・ライシャワーが日本大使として東京に就任したのも安保闘争直後の一九六一年でした。この時期には、近代化論の優れた仕事として注目されたロバート・ベラの『徳川時代の宗教』などが出版されています。ベラの仕事は、国民性研究が近代化論へ変身する過程を洗練された仕方で示していて、いわゆる「伝統」社会がいかにして進歩の軌道に乗るかあるいは乗り損なうかを、社会科学的な方法論を駆使して論じています。近代化論が地域研究を席捲した理由として、地域研究がその基本構造としてアメリカ合州国の世界戦略の正統化の任務を引き受けている点を挙げなければなりません。さらに、世界中の社会を伝統的傾向と近代的傾向の二つの対立する要素によって分類し、伝統的社会は資本主義的合理性を受容する能力に欠けるとし、近代的社会では伝統的傾向を近代的合理性が克服することによって進歩が実現されるとする、露骨に西洋中心的な世界観を推挙した点も挙げなければならないでしょう。

戦前の世界史が西ヨーロッパを人類の発展史の頂点に位置づけたとすれば、近代化論は近代化の可能性をもつ全ての社会は、いずれは、アメリカ合州国社会のようになるとする歴史観を臆面もなく提示しました。全人類はアメリカ国民を模倣するよう運命付けられているというわけです。地域研究の知識生産には、このような西洋中心主義とアメリカ合州国の国民的自慰の性格が構造として内在していました。これは、第二次世界大戦後の植民地主義がつぎつぎに崩壊するこの時期に、民族主義から反植民地主義の牙を抜くために必要な操作でした。この意

味で日本は、合州国の広域支配の体制にとって最も優等生的な国民・民族主義を作り出してくれたといってよいでしょう。

しばしば、日本人研究者による日本文化研究は、抑圧された愛国の願望に裏打ちされているといわれます。「西洋人による一方的な文明観に対抗して、日本の伝統に基づいた文明を示してみたい」、「非西洋人である日本人が日本人特有の世界観を提示してみたい」、「自虐的な近代化論ではない自らの伝統を誇るような議論をしてみたい」。しかし、このような願望は簡単に国民性研究に代表された対―形象化の図式に捉えられてしまうのです。その時、日本文化研究は合州国の広域支配の補完的な役割を嫌が応にも果たしてしまうでしょう。パックス・アメリカーナの終焉の兆候があらわになってきた今、私たちはこれまでとは異なった知識の生産の様式、国民共同体とは異なった共同性を作ることのできる新たな社会関係の可能性の身近にいるのではないでしょうか。西洋対東洋、ヨーロッパ対アジア、白人対黄人、といった西洋中心的な対―形象の図式から自らを解き放つ時がやってきたのではないでしょうか。

（コーネル大学人文学部教授）

「帝国」史としての日本研究——日文研プロジェクトの試み

劉　建　輝

モダニティとナショナリティからの脱却を指標とする「開かれた歴史」が唱えられて久しい。中でも、具体的にトランスナショナル・ヒストリーの構築を主張する声が近年、学会等で特によく聞こえる。しかし、実践上の困難が相当大きいのだろうか、いわゆる歴史学の「現場」を覗いてみると、なかなかその成果を見付けることが難しい。その意味で、きわめて魅力的で有意義な挑戦であるが、やや「理論」が先行していることも否めない。

このような事態をそれぞれの研究者がどこまで意識しているかはわからないが、確実に言えるのは、ここ数年、日文研では、そうした歴史の脱構築を目指す共同研究会やプロジェクト、国際シンポジウムが実に数多く主催、または開催されたということである。そしてそれらはあたかも主宰者同士が事前に相談し合ったかのように、いずれも「帝国」という枠組みを設定し、それぞれの分野において果敢にこの課題に挑戦している。

なぜ「帝国」なのだろうか。むろん、それは各企画者や参加者の長年にわたる学問的営為が来すべくして来した当然の内的帰趨に違いない。そのため、私は彼らの主催、または開催の意図をかってに代弁することはできないし、その資格もない。とすれば、手前味噌ではなはだ恐縮だが、ここで、私自身がいかなる思惑でこれらの研究会やプロジェクトに関わり、そこでいかなる問題の解決を目指したかを説明し、いささかでも昨今の日文研のこうした研究動向を紹

介してみたい。

周知の通り、近代日本は、世界的に西洋に遅れた後発的国民国家として、また東アジア域内的に周囲に先んじて西洋文明を実践した近代国家として、当初から国民国家的構築と近代帝国的構築を同時進行的に進めざるを得ない運命にあった。そのため、あらゆる後進的帝国と同様、一見相反する力学が終始互換的に働き、まさに両者が合わせてその近代的成立を支えてきた。その意味で、近代日本は「脱亜」したどころか、むしろ周縁との関係においてこそ存在し続けることができたのである（むろん、前近代においてもそれはつねに東アジア域内の秩序と接続していたし、また近代以降においてはそのままグローバルな資本主義「世界システム」に統合されていたが、その両者との関係については、ここではあえて割愛させて頂く）。しかし、従来の歴史学では、あたかも一つの前提のように、その出発点から「近代」ないしは「国家」を自らの思惟する枠組み、または物差しとしているため、こうした周縁との互換かつ横断的な関連が必然的に後景化してしまい、たとえそれを議論の俎上に載せても、結局は植民地への工業化等の遂行を強調する近代化論になるか、さもなければそれへの経済的搾取を強調する収奪論になるという、いずれも一方通行的なものに収斂されてしまう。

このような状況を打破するために、むろん、前近代的秩序、またその後の資本主義的「世界システム」との関連を含め、さまざまな認識論上の再布置が必要だろう。そして東アジア域内のこの数百年の歴史（中華秩序の崩壊と近代日本の勃興）を踏まえれば、やはりまず「帝国」という「単位」を立ち上げ、その枠組みの中に日本およびその周縁を解き放つべきだろう。どこまで共有してもらえるかわからないが、それが一国史観的な近代日本研究を止揚し、あらためて世界史的にその存在を位置付ける最初の一歩だと、私は信じている。

さて、日文研で展開されてきたこの「帝国」史、ないしは「帝国」論の構築は一体どういうものがあるのだろうか。たとえば、直近の共同研究だけを見ても、「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」（鈴木貞美教授主宰）「東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に」（右に同じ）「植民地帝国日本における支配と地域社会」（松田利彦教授主宰）「植民地帝国日本における知と権力」（右に同じ）「新大陸の日系移民の歴史と文化」（細川周平教授主宰）「帝国と高等教育―東アジアの文脈」（酒井哲哉客員教授主宰）などが挙げられ、他にも関連するプロジェクトや国際会議等が多数存在している。ここでそれを逐一紹介する余裕はないが、私自身が関わったものをいくつか並べてその一端を提示しよう。

一つ目は、東アジア域内における近代概念ないしは言説の成立と流布をめぐる探求である。これは、おもに退職された鈴木貞美氏を中心に展開されたものだが、十数年にわたり、共同研究、国際研究集会、また科学研究費プロジェクト等を通して、まさに大々的に進められていた。その成果として、近代諸概念、またそれによって生産された近代諸言説（文学、芸術等）がいかに帝国日本を中心に生成し、またその周縁との往還運動の中で補強されながら、一つの権力体系を形成していったかが明確に浮かび上がってきた。つまり、まだすべてについて解明されたわけではないが、個々の概念や言説が伝統的な意味合いを背負いながらもいかに近代的に再編され、そしてそれがどのような形で東アジア域内で流布、浸透していたかという全体的な把握がようやく可能となったのである。

二つ目は、日本帝国の植民地、占領地、中でもとりわけ旧「満洲」についての考察である。これは、ここ十数年、私が共同研究「近代中国東北部（旧満洲）文化に関する総合研究」「『満洲』学の整理と再編」等を通して進めてきた課題である。その狙いは、先ほども触れた従来の

「近代化論」「収奪論」という、いわば二項対立的な認識布置から脱却し、できるだけ帝国日本と植民地「満洲」を一つの共時的、横断的な連関構造の中に還元させ、そしてその背後にある「近代」そのものの両義性を解明しようとするものである。むろん、この目的はかならずしも達成したわけではないので、今後も引き続き模索する予定である。

そして三つ目は、近現代日本人海外移民に関する研究である。これは、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトB「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」というものだが、前責任者鈴木貞美氏の退職に伴い、今、私がまとめ役を務めている研究テーマである。帝国の一要素を構成する海外移民について、従来も多くの研究が存在するが、ここで特に解明しようとしているのは、やはり現地、つまり移植民地社会との関係である。帝国の体現者でありながら、同時に「余計」者でもある移民たちが現地でいかなる活動を展開していたかを考察することによって、本国日本と移植民地との関連性を構造的に浮き彫りにすることができると考えている。

四つ目は、東アジア域内におけるツーリズムの問題である。海外移民と同様、帝国圏内の旅行もその成立と存続を支えるものとして数えられる。日文研では、白幡洋三郎氏を中心に、長年にわたって国内外のツーリズム関連の第一次資料を収集してきた。中には、いわゆる「外地」の風景等を内容とする絵葉書や帝国圏内各地の旅行案内、各植民地、占領地の地図が数多く含まれている。これらは現地状況や人的移動など多方面の情報源として植民地、占領地、さらに帝国そのものの認識に大きく貢献できるだけでなく、一表象体として、そこに無限の文化的分析材料が凝縮されている。今年度からすでにプロジェクトを立ち上げており、今後内外の研究者と協力しながら鋭意、整理・分析作業を進めて行きたいと思っている。

以上、きわめて概略的だが、いわゆる「帝国」史の構築と関連し、かつ私が関わっている日文研内の諸研究課題について紹介した。言うまでもなく、これらはけっして一人や二人で実現できるものではなく、かならず多くの研究者と一緒に挑戦しなければならない大掛かりなテーマである。そして冒頭に申し上げた大言壮語とは裏腹に、そのいずれもまだすべて道半ばで、今後こそまさに正念場を迎えるところである。本特集の意図する？「日本」研究の真の脱構築はまだまだこれからだと言わざるを得ない。

（国際日本文化研究センター教授）

広く長く、そして深く——外国人研究者とつきあう法

鈴木貞美

三月末に定年退職して三か月経つ。二五年間、なんと慌ただしい日々を送ってきたことか、と我ながら呆れはてている。もちろん、そうでなければ、得られなかったことばかりなので、悔やんでいるわけではない。著作の不足や不備は補いをつけながら、せいぜい、仕上げを楽しんでゆきたい。

本誌の編集長が、海外の研究者とのつきあい方のノウ・ハウを書き遺せという。影の声は、こうささやいている。鈴木はろくに語学もできないのに、どうして年に五回も六回も海外のシ

ンポや集中講義に呼ばれるのか？

そう、わたしは人も知るように語学はまったく苦手。英語のペイパーを読むくらいのことはしてきたが、行きの飛行機のなかで繰り返し練習してのこと。二〇一三年夏、シアトルでは日本語の分からない若い人が多い会場で、質問にも英語で答えなくてはならないハメになり、矢次早に浴びせられる質問に、司会者に手伝ってもらいながら、やっとのことで切り抜けたが、思いもかけず、暖かい拍手に包まれた。

いや、そういえば、かなり以前、オーストラリアでも似たことがあった。東洋系移民の多いところでは、漢語概念の近代化の話はかなりの関心をもって聴いてもらえるのだと納得。よい思い出をひとつ加えることができた、ということにして、この話はおさめよう。

日文研に勤めはじめたとき、海外の研究者で知人と呼べるのは、四、五人しかいなかった。尾崎秀樹氏の大衆文学研究会が北京の中国社会科学院で行ったシンポジウムで顔見知りになった人ばかりである。その一人が劉建輝氏、もうひとりが社会科学院の外国文学研究所の魏大海氏、あとは社会科学院の重鎮クラス。だから、親しくなった海外の研究者のほとんどが、その後、日文研の活動を通して知り合ったことになる。

日文研は海外における日本研究をサポートすることを目的にしてつくられた機関である。所員の任務を学術外交などと考えることは、政治的駆け引きが入りそうで御免蒙る。学術上の「水商売」と心得ていれば間違いはない、というのが、かねての持論である。客人と酒を酌み交わせばよい、などというつもりはない。内外からお客を招き、個別に、また催し物を開くなどしてさまざまに接待するのだから、研究サーヴィスに徹するという意味である。ファースト・フード店の売り子ではないのだから、つくり笑顔はいらない。売り物は資料と議論だけで

充分だ。

まずは、広い意味での研究相談への応接。思いもかけない問題意識をぶつけられ、触発されることも多い。必要な資料の在りか、探索の仕方、便利なトゥール、研究方法、先行研究とその問題点……　関連する最近の研究動向、等々が相談を受けて即座に答えられるわけもない。最近では各種のデータベースもどんどん増えている。適任者を紹介すれば済むなら、それに越したことはない。が、相手が一人前の研究者なら、自分なりの問題意識をもち、方法も身に着けている。日本の先行研究のあらかたも知っている。その上での相談である。こちらも近接領域の専門家に相談し、先方の必要に応じて、提供すべき内容をアレンジする。一緒に資料にあたり、先行研究をめぐって議論することも多い。

たとえば日中間の文化交流なら、比較文化、中国文学文化、日本文学文化研究の各分野にまたがって先行研究があり、しかし、それらの間に互いに議論が行われていないことが、日本の研究者間の盲点になっている。当然なされなければならないことがなされていない。それに類することがいくらでもある。

わたしの場合は、日本近現代の文芸や文化が専門だから、当該時期の適当な総合雑誌や専門雑誌に当たることをよく勧めた。海外の研究者に当該時期の雑誌に目を通す機会はまずないし、そういう訓練も受けていない。自分が課題として取り組む問題の周辺、同時代の背景が手にとるようにわかる、ということがわかる程度までつきあう。そして、文学事典や百科事典類で、今日の日本人の研究者の「常識」を確認し、その項目の執筆者の立場や分析スキームに注目しておく。それだけで文献を読む力をもつ研究者には、既成の「常識」を突破する新しい研究の視野が拓けてくる。あとは、一年間はあっという間に過ぎるということだけアドヴァイス

すればよい。感謝してもらえること請け合いである。

こちらもこの辺の雑誌をあたれば、と見当だけはつくが、もちろん、すべての記事を読んでいるはずもない。読んでいても問題意識が異なれば、またちがう側面が見えてくる。話の過程で、関連する最近の研究動向や注目すべき研究書、研究者にもふれるし、論文も見せあうことになる。関心の近い研究者に声をかけて少人数で議論する場をもうける。長くつづけてきた基礎領域研究「文化論の基礎概念と方法」は、その方式を定例化したものである。あるアメリカの教授は親しい友人や見込みのある院生を何人も寄こした。「知らない研究者でも論文を読んだだけで、あ、日文研の『鈴木道場』に通ったな、とわかりますよ」と言っていた。

若い研究者には、問題設定のしかたから一緒に検討しなくてはならないことが多い。努力の方向がまちがっていたら、どんなに時間をかけてもすべてが無駄になる。日本における各分野の文化研究は、とくに八〇年代から大きく変化してきた。なかにはおかしな通説も横行している。それが先生を通じて院生に刷り込まれている。とても、よい鏡になる。先行研究の問題点や「刷り込み」のおかしさに気づけば、新たな方向が拓ける。久しぶりに出会った人から「あのとき、相談に行っていなければ、まだ麓のあたりでうろうろしていたでしょう」と感謝されるのはうれしい。初対面の研究者から博士論文の行く手が見えなくなっていたとき、鈴木の著作にまとまるきっかけをもらったと言われれば悪い気はしない。

これらすべてが、自分の研究にはねかえる。年に二人か三人とつきあうだけで、五年、一〇年と経てば、自分の視野が格段にひろがり、根拠資料も反証も蓄積される。知見もまるでちがったものになる。

もうひとつある。いくら日本語を話すのが上手な外国人の研究者でも書くとなると別であ

る。厭わずに丁寧に見てあげること。そうすれば、向こうも、こちらの英文を丁寧に見てくれるし、中国語などへの翻訳も引き受けてくれる。相談にも乗ってくれる。ついでに中身の細かいことも議論できるし、こちらも考え直すこともある。「情は他人のためならず」である。この意味、最近、取り違えている人が多いようですが。

それとは別に内外の各種シンポジウムや研究会がある。オーディエンスは、ほとんどが大学院生以上だから、学部学生相手のような中身では話にならない。かといって、専門の話なら専門の学会でやればよい。日文研が国際性、学際性を表看板に掲げる以上、「興業」には異種格闘技のリングを張ることになる。そこでの議論の面白さを味わってもらうことが出来れば、あそこは一味ちがうと自ずと人は集まる。国際巡業も長続きする。異種格闘技のリングで闘わされる議論は、結局のところ、そのテーマの文化史的背景を巡るものになることが多い。第二次世界大戦後には国際的に学問諸領域に構造主義記号論がひろがり、歴史的変化の研究が手薄になった。その反動で、このところ、各領域の細部の歴史を調べることが盛んになっている。どんなに新しい資料を掘り起こしても、そして、これまで言われてきたことと異なることを資料が告げていても、それを分析するスキームがありきたりなら、ありきたりの結論しか導きだせない。そこで問題は、概念や研究方法、分析スキームの地域的歴史的な相対化をはかることになる。

たとえば先日、日本近代文学会で留学生からパネル発表を見てほしいといわれて出ていった。戦争期の植民地などの文学者の作品や言論と取り組む研究を並べたもので題材はみな面白かった。ところが、みな判を押したように戦争に対する「協力」と「抵抗」の組み合わせ具合を論じていた。この一〇年以上続いている傾向で、彼女たちの先生の顔まで見えるようだっ

た。一時期の断罪的な研究よりよほどマシだが、なぜ、「協力」と「抵抗」が交錯するのか、に踏み込めない。なぜなら、日本が「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の旗を掲げていたことに対するリアクションという分析視角を欠いているからだ。日本帝国主義という本質規定と、時々刻々変化する国際情勢のなかで日本政府がとった政策、それとも整合しない軍の動きなどの諸問題が、整理できていない。文学に限らず、留学生に限らず、戦争期の研究は盛んだが、「軍国主義」も「ファシズム」も、概念規定すら出来ないまま、ほとんどムード的に用いられてきた。総力戦体制づくりに入った一九三八年九月から「軍国主義」と規定するのか、それとも東条英機が軍服を着たまま内閣総理大臣の椅子に座ったときからをいうのか。

どちらかに決めろ、というのでなく、定義①、定義②としてもよい。第二次大戦後の日本における論議が、すでに二項対立的だった。その後、一九八〇年代以降、今日までの議論は、竹内好「近代の超克」（一九五九）が提起した種々の問題さえ踏まえない。福沢諭吉が一万円札に刷り込まれたころから、「明治以来の脱亜入欧」などということばを刷り込まれて帰国し、学生に刷り込む人が多くなった。そんな歴史認識からは、もう、このあたりで抜け出るべきではないか。

これは、もちろん、ほんの一例にすぎない。外国人の研究者からの質問に精確に答えきれない自分、国際シンポジウムや共同研究の場で飛び交う、まるでかみあわない議論に嫌気がさしている自分、そういうモヤモヤを吹っ切るために、概念構成とその再編の研究をはじめたのだった。「文学」関連だけでなく、「生命」も「エネルギー」も、少しずつでも進めていけば、海外から有力な協力者が出てくる。ワークショップやシンポジウムも開かれる。そこでは剛速球も回転のかかったサーヴィスもいらない。相手コートに深く打ち返すラリーを息長く続けら

れる力だけが問われる。わたしはサーヴィス合戦からは離脱したが、ラリーにはまだ応じている。

外国の日本研究者と広く長く、そして深くつきあいたいなら、彼女らや彼らを研究仲間として心底必要とし、そして彼女らや彼らに必要とされる研究をすること、それにつきると思う。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

文明史研究における外書コレクション
――日本資料専門家欧州協会二〇一二年会議を振り返って

フレデリック・クレインス

二〇一二年九月一八～二二日に日本資料専門家欧州協会（EAJRS）のベルリン大会に資料課の辰野直子資料管理係長と共に参加した。私にとっては三度目の参加であった。日本資料専門家欧州協会は一九八八年に設立され、職業として日本の資料に携わるヨーロッパの図書館司書・学芸員・学者からなる学会であると位置づけられる。毎年、ヨーロッパのいずれかの都市で会議が開催されている。ヨーロッパ人だけでなく、日本人やアメリカ人の参加者も多い。協会設立の契機はパソコン技術の向上およびインターネットの出現であった。これらの道具を使って、日本資料の目録化やデータベース作成における国際協力が技術的に可能となった。そ

の中で、国立情報学研究所による目録所在情報サービスNACSIS-CAT開始のほかに、日文研が当時手がけていたデータベースの開発も協会設立への刺激となった。

毎年の会議では、日本資料のデータベース化というテーマがプログラムの中心的な位置を占めているが、ベルリン会議でも例外ではなかった。特に注目すべきテーマは古典籍のデータベース化であった。古典籍の画像のオンライン化が驚くべきスピードで進み、そのデータ量は膨大な域に達している。日文研は外書を含む古典籍のデータベース化に先駆的な役割を果たしてきたが、現在、東西のあらゆる機関においてもデジタル画像のオンライン化が進んできて、日文研の特異性が薄れてきている。しかし、今回のベルリン会議で強く感じたのは、各機関でできるだけ多くのデータをオンライン化するのに最大限の努力がされている反面、書誌や文献学的背景情報の提供が疎かになっているのではないかということである。もちろん、とりあえずデータだけでも利用者に提供することが先決であろうが、今後はデータの提示法が大きな課題となる。

日文研では、創立当初から「外書」と呼ばれる日本関係欧文図書コレクションを収集してきた。現在、この外書コレクションはその質と量において世界に類を見ないものであり、それをさらに充実させるために随時購入活動を続けている。イエズス会関連を除く江戸時代の資料に関していえば、これらの外書の出版元であるヨーロッパにいるよりも日文研にいた方が研究・調査にとってよほど便利である。いや、多くの外書の画像がすでにオンライン化されているので、日文研に来なくても、日文研のウェブサイトさえ開けば、利用できるという状態になっている。しかし、これで十分なのか。つまり、外書コレクションの収集・データベース化を継続しながら、データの活用に移る時期に来ているのではないかと思う。

外書の活用について考える場合、まず対象となる利用者を特定しないといけない。外書の専門家のみを利用者と考えると、現状でも問題ない。専門家なら十分知識があるので、資料さえ提供すれば、後は自分で必要な情報を探し出せる。また、松田清先生と白幡洋三郎先生が編纂された『日本関係欧文図書目録』という詳細な書誌もこれらの専門家にとって、外書コレクションを一層利用しやすくしている。専門家だけを利用者と位置付ける場合、この目録が出版された一九九八年以降に収集してきた資料についても増補版を編纂すれば、ことは足りる。しかし、純粋な「外書の専門家」は数が極めて限定されている。

外書は専門家のみならず、広い領域の研究者にとって有益な情報を含んでいる。外書の中でイエズス会士の書簡やオランダ商館長の日記や書簡のような一次資料は、日本の歴史や文化史において重要な補足的な情報を提供してくれる性質をもっている。オランダ商館長は日本で見たもの、聞いたものをすべて詳細に記録していた。例えば、毎年の将軍への謁見の様子は日本側資料よりもはるかに詳細に記述されている。二条城行幸や明暦の大火などについても、それらを目の当たりにしたオランダ人の詳細な日記が残っている。シーボルトの情報収集活動に至っては、文字や画像情報だけでなく、モノも大量に現存している。また、長崎での貿易や異文化交渉について研究する場合、オランダ商館長日記は欠かせない資料であることは言うまでもない。これらの資料は西洋の日本学者にはある程度活用されているが、正統派の日本文化史研究者にはほとんど利用されていない。後者にとっては、六万冊から成る外書コレクションによって提供されるデータがあまりにも多く、日文研のデータベースにアクセスすると、「林に入り林を見ず」という状態に陥る。

このような日本文化史研究者のために、なんらかの形で外書およびその内容のデータの整理

や解説が必要である。具体的には、各外書の書誌情報のほか、一次資料・二次資料の有無、内容の解説や原典、日本側資料との比較などが思い浮かぶ。また、「秀吉」や「庭園」、「刀」、「国政」などのようなキーワードを検索すると、そのキーワードに関係のある資料へのリンクが時系列に表示されるというようなシステムを開発すれば、日本文化史研究者にとってかなり便利なツールに発展し得る。もちろん、これは壮大な計画であり、その実現のために日文研では到底人手が足りないが、ウェブサイト作成の如く、工夫を凝らして少しずつ追加すれば、可能であるような気がする。

しかし、潜在的利用者を満足させる前に、外書収集やデータベース化の目的について考察しなければならない。日文研は共同研究の開催や外国人研究員の受け入れ、研究情報の発信などをもって、国内外において日本文化学に対する研究協力を行う機関である。外書収集やデータベース化はこの研究協力の一環として位置づけられる。つまり、外書を収集することによって、国際的に行われる日本文化史研究を把握すると共に、それらの情報を世界に発信することができる。

この観点からすると、外書における情報が単に日本文化史研究において日本側資料における情報を補うだけでなく、「日本文化学」そのものが収集の重要なテーマになってくる。「日本文化学」としての外書は、実際日本の地を踏んだイエズス会士や東インド会社職員が本国に送った報告書や出版された紀行よりも、それらの情報を元に日本文化について執筆した知識人の著作の方が重要な位置を占める。イエズス会士の書簡を元に日本誌を著したマッフェイをはじめ、オランダ商館長の江戸参府日記を元に日本文化の比較文化史を著したモンターヌス、ケンペルの『日本史』における情報を元に編纂されたディドロ『百科全書』の「日本」項目などは

日本文化が西洋にどのように研究されてきたのかを解明するのに絶好の資料である。このように、これらの外書を収集することは日文研の設立目的に適合する。

しかし、日文研の外書コレクションは、日本史研究への貢献や国際的な日本文化学史の解明以上に重要な価値を秘めていると感じる。というのは、外書コレクションは西洋における日本観の形成過程を解明する可能性を内包しているからである。この西洋における日本観が確立したのは大航海時代の頃であり、現在に至ってもあまり変わっていない。大航海時代において、行き来する数人の冒険家を除けば、日本は西洋と隔離していた。日本についての情報のほとんどは書物を通じて西洋人に伝達されたため、その影響力が極めて強かった。

この日本観の成立について具体的な例を一つ挙げるとすれば、日本の軍国主義のイメージが思い浮かぶ。最初に日本について報告したのはイエズス会士であり、彼らが観た日本は戦国時代であった。それゆえに、日本人は尚武の気性に富む国民とみなされた。この最初の印象があまりにも強かったため、二〇〇年以上もの間平和が保たれた江戸時代を目の当たりにした東インド会社の職員の報告によっても変わらなかった。日本の長い平和を讃えるケンペルの「鎖国論」でさえ、この印象を払拭できなかった。むしろ、第二次世界大戦をきっかけに軍国主義のイメージが一層強化された。現代の日本は七〇年間近く戦争との関わりを一切もってこなかった国であり、平和を好む国民が多い。それにもかかわらず、日本の軍国主義のイメージが現在でも西洋諸国民の間に強く根付いている。この西洋における日本観と現代日本の現実とのギャップの大きさが様々な外交問題の根底にあり、文化間理解の妨げになっている。

外書コレクションは日本について書かれた欧文図書をほぼ網羅しているので、西洋における日本観の各要素の成立および変化を一つ一つ辿ることを可能にしている。それゆえに、外書コ

レクションは「日本文化学」の域を超えて、「世界の中の日本」という文明史研究の大きな課題を提供してくれる。外書の活用はこの課題から出発すべきである。具体的には、やはりデータの整理や解説、リンクの作成が必要となる。このような作業に共同研究会の形式は不向きである。また、このような作業は一人の研究者の能力も超えている。とはいえ、いくつかの方法が思い当たる。外書プロジェクトの中で、若手のプロジェクト員にリレー形式で長い期間をかけてデータを作成して、随時オンライン化してもらうこと。奨学金制度を設けて、国内外から若手研究者にリレー形式で作業をしてもらうこと。それとも、共同研究会の形式を利用して、各委員に作業分担を振り分けること。いずれにせよ、途方もない時間と労力のかかる作業ではあるが、文明史研究における外書コレクションの可能性を引き出すのに有意義な試みであろう。

（国際日本文化研究センター准教授）

コモンルームだより

山本小百合・奥田増栄

私達が働く研究部受付、通称「コモンルーム」は一言で言えば、研究者の皆様が交流される場です。日文研エントランスをまっすぐに進んだ研究棟の入り口にあり、広いスペースで開放感たっぷりのサロンのような空間です。そしてその空間を一度に見渡せる位置に受付カウンターが配置されています。中庭に面しているため、眺めも良く、自然の豊かさを感じられる快適な環境です。過去に何度か鳥が迷いこんできたこともありました。猿や鹿を見かけることもあります。中庭の木々や草花が四季折々の表情を見せてくれますので、その美しい庭に心が癒され、励ましや力を与えられる毎日です。もちろん、来訪者の方々にも大変好評です。

私達受付の仕事は朝八時半から始まります。まずは、窓を開けて空気の入れ換えをします。その後お湯を沸かし、珈琲を作り、簡単な清掃や新聞の仕分け等をしたら、皆様をお迎えする準備も完了です。コモンルームの朝一番のさわやかな空気が好き、と言われることもあります。庭から聞こえてくる鳥の鳴き声や充満した珈琲の良い香りのおかげなのかもしれません。またコモンルームの珈琲が美味しい、と度々言っていただくことがあるのですが、実はもう何十年も同じコーヒーメーカーを使用しています。お褒めいただけるのは、こちらのとても優秀な機械のおかげです。もう手放せません。

一人また一人と先生方が来所され、受付カウンターで研究

室の鍵を渡し、連絡事項があればその際にお伝えします。先生方はお忙しい方ばかりなので、このタイミングを逃すと後にお話しすることが難しいこともあり、やはりこの時がベストです。そしてその合間に先生方や職員からの問い合わせの対応をします。その他、郵便の仕分け作業、電話対応や来客対応もあります。コモンルームにはソファとテーブルのセットが並んでいて、打ち合わせ、歓談、意見交換や取材等に利用されます。また受付近くにはファックスやコピー機などの設備も揃っています。忙しい日にはそれらがフル稼働し、普段は比較的静かなコモンルームもとても賑やかになります。疲れを感じた時やちょっとした休憩をしたい時にも最適な場所となっていますので、珈琲を飲みながらご歓談される先生方も多くいらっしゃいます。

来客の際には、先生方の取材等の光景も伺えます。丁寧にそして熱心に対応されている姿を拝見して、日文研スタッフであることを誇らしく感じたりします。時には写真撮影もあり、後日新聞等でその時のものと思われる写真を拝見することもあります。「ああ、あの時の写真だな」と感じることができ、なかなか興味深いです。先生方はさすがプロ、とっても自然体の良い写真に仕上がっています。

学生さんをご指導される光景を目にすることもあります。指導する方もされる方も真剣そのもので、時には厳しい言葉も聞こえてきます。この時は穏やかな空気が一転、張り詰めた空気が漂い、私達もこれが指導というものだと垣間見る瞬間です。

そんな忙しい日常の合間に先生方が私達にお声をかけて下さることもあります。研究のお話をお聞きする絶好の機会です。皆さんそれぞれご専門が違うこともあり、お話しして下さる内容も多岐にわたります。

研究部には外国人研究者の方々もたくさんいらっしゃいます。お国は様々、国際色豊かです。文化の違いや日本独特の習慣等についてのお話をお聞きすることもでき、勉強になります。コモンルームでは様々な言語が飛び交う場所でもあります。英語はもちろん中国語や韓国語、その他にもベトナム語やオランダ語等、普段あまり耳にすることのない外国語だったりもします。日本にいながら世界を感じられ、本当に贅沢な空間だと感じています。国境を越えてご歓談され、笑顔が溢れる時、私達もホッとします。このような和やかな時間は、研究者の先生方にとっても貴重な時間のように見受けられます。この歓談の時間も含め、全てが研究の糧となられ

ているのではないでしょうか。

以上、簡単にコモンルームの日常をご紹介しましたが、個性豊かな先生方の中ではなかなかユニークな出来事もたくさん起こります。毎日のルーティーンの仕事以外にも臨機応変な対応を求められることもあり、勉強の日々です。このような素晴らしい環境、そして様々な分野でご活躍されている先生方の研究を間近に感じることができ、たいへん光栄です。ですから私たちも感謝の気持ちをもって、穏やかで暖かみのある雰囲気作りを心がけ、日々務めるようにしております。そして皆様をお迎えする時には、全ての思いを込めてご挨拶したいと思っています。「おはようございます」、「こんにちは」。

木曜セミナーから学ぶ

堀　まどか

二〇〇三年春以来、総研大の院生、そして機関研究員として、「木曜セミナー」を拝聴してきた立場だった私は、今回初めてそこへ自ら登壇する機会を得た。今回学んだ点を簡単に記しておきたい。

第一九五回木曜セミナー「二〇世紀初頭の俳句・能の海外発信――『二重国籍』詩人・野口米次郎のもたらしたもの」

コメンテイター：三原芳秋同志社大学准教授

開催日：二〇一三年二月二一日

場所：日文研セミナー室1

（一―一）コメンテイター（外部の研究者）とのセッション

当初は自分の報告だけを依頼されたが、この機を生かしてかねてから敬意を抱いていた研究者（三原芳秋氏）にコメンテイターとして来てもらうように交渉してみた。日本文学研究から比較文学研究に研究途中で移項した私は、理論面や議論技術が極めて弱いことを自覚している。氏は英米モダニズム文学およびポストコロニアルの批評理論が専門で、かつ私がこれから足を踏み入れようとしている植民地朝鮮の事象にも詳しいので、理論や東アジアでの理解の問題という自分に欠けている点を指摘してもらって、これからの課題を明確化したいと考えた。日文研の先生方からはこれまで多大な御教

示を受けてきたが、ここでは通常とは異なる「遭遇」をみてもらい、御指導を得て、今後の研究の「可能性」を可視化したかった。何はともあれ、外部との出会いは刺激的であり、攪乱が期待できるので面白いだろうと思った。

（一―二）広報の方法

研究協力課の方と連携をとって、面識のある新聞記者の方や出版社の方などとも連絡を取り、外部の若い研究者が来てくれるような工夫を考えた。そのためかどうかは定かではないが、若手の研究者にすぎない私の報告にもかかわらず、参加人数が通常より少し多かったように思われる。やはり、外部の方が、特に若い研究者や院生たちが、木セミに関心を持っていることを感じた。国内／国外の研究者の交流や異分野の領域横断的交流に加えて、外部の若い研究者が参加してくれることは、私たち研究員や院生にとって大きな励みになる。また特に思いがけなかったのは、長年お目に掛かってみたかったサンディップ・K・タゴール氏（R・タゴールの遺族）がどこからかセミナー情報を聞きつけて来所してくれたことである。

（二―一）セミナーの冒頭で

まず最初に、司会者から発表者の紹介をしていただけたことが非常に良かった。外国人研究員やフェローの人などに、私のような研究員や外部から来たコメンテイターの情報を、経歴だけでなく研究内容まで簡単に紹介してもらえたことは有効である。（出入りの激しい日文研では、お互いの顔を見知っていても、専門やその背景を知るタイミングを逸していることが多々あるからである。）外部からの聴衆もあったので、冒頭紹介がなされたことで内部向けに閉じられた雰囲気が無くなり、海外のセミナーのような緊張感があった。

（二―二）発表方法

今回の私の発表では、①「二重国籍者」とはなにか、②それが戦争への傾斜という時局の中でどのような表現の政治性に流れていくのかを主題とした。これは日文研に集う誰もが関心を共有する普遍的なテーマであると考えたからである。理論的に未熟であることは自覚していたが、それを様々な角度から指摘してもらうことが今後の自分には勉強になると思い、あえてこの部分で議論の場を設定した。とくに注意したのは、フロアとの議論を最優先して、一方的な話にならない

よう三〇分の時間を残したことである。

（二―三）議論

私のプレゼンでは、「二重国籍」詩人と呼ばれた野口が、言語化できないものをいかに日本及び西洋の読者に表現しようとしたのかという「表象の過程」を問題にしていた。だが、うまく伝わらなかったところがあったのかもしれず、最初の外国人研究者からの質問では、「真」の日本は何かという本質論になってしまった。私の期待と異なる方向に流れていく状況を救ってくださるかのように、その後、国民国家は植民地や帝国が夢想する幻想ではないかという指摘（磯前順一准教授）、「二重国籍」といういわば空洞の概念に野口はどう「戯れ」ているのか、その変化の過程を検証する必要があるという指摘（鈴木貞美教授）がなされた。また、「西洋／東洋」、「二重国籍者」、「境界」といった主体形成を批判するべきではないのか、といった理論面の指摘（三原氏）も大変重要で鋭く新鮮だった。それぞれ何が問われているかを理解しながらも、その場では的確な返答や見解を示すだけの余裕も能力もなかった。（私は、長年親しんできた先生方についても、これまで十分に理解していなかったのではないかと気づかされて、ハッとしていた。）

（二―四）課題

結局、貴重なコメントを多数受けながらも、個々の発言を点のままに残してしまい、線として展開させられなかった。もっと個々の発言の問題点を自分なりに再解釈し、整理しつつ、議論をつなげるべきだったのだが。また、コメンテイターと前々日に打ち合わせしていた話題も議論を通して展開しようとしていた方向性も、私の経験不足のせいで全く生かすことが出来なかった。忸怩たる思いが残っている。しかし、この思いは大切にして今後に繋げたいと思う。（※）

（三）最後に

この「木曜セミナー」では、専門知識を共有するメンバーで行う共同研究会とは異なる、より開かれた知の空間――実験的に研究の現場を披露し、研究の躍動と展開を醸造する場――が作り出せることを体感した。つまり、各共同研究の報告やプロジェクトの成果や、専任・客員・研究員の最近の関心事に触れる自由な空間であり、外部からの思わぬ攪乱をも積極的に楽しみながら、日本研究の方向を模索することがで

きる挑戦的な舞台なのだ。国内と国外、諸分野の交流を目的とする日文研にとって、この木曜セミナーが、その学問的交流の場としての「心臓部」をなしているのかもしれない、とも感じた。

（※補記）個人的な観点からいえば、翌々日に韓国に赴任する予定であった私にとっては、今回の木セミは、自分自身の限界と課題を強烈に体に刻みつける場であり、愛する恩師たちから公式に「送る言葉」をいただく場であった。セミナー後にも、数々の激励の言葉や温かい送別の辞をいただいた。生涯忘れ得ぬ舞台空間を与えていただいた幸運に、こころから感謝している。

（嶺南大学校講師／元国際日本文化研究センター機関研究員）

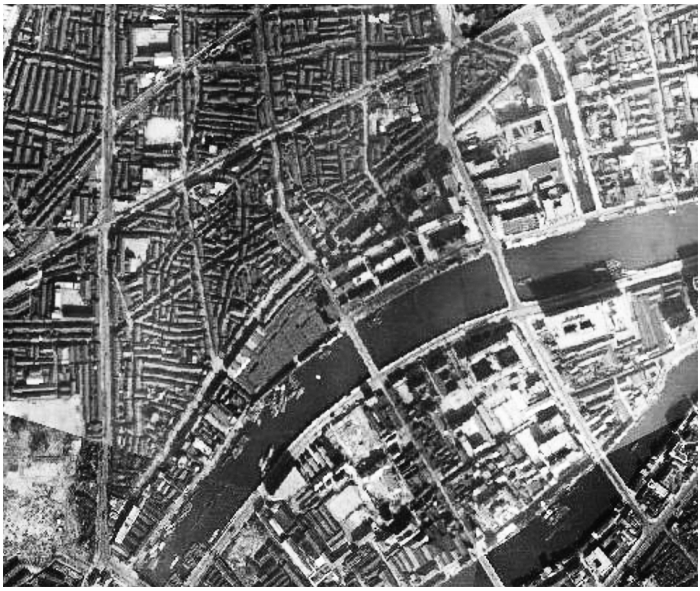
アーカイヴということ

森　洋久

現代アートのアーカイヴを通じて、アーカイヴの本質に迫ったシンポジウム「アート・アーカイヴⅢ：今、あらためてアーカイヴを問う」（二〇一三年三月二三日）に参加した。吉原治良が中心となって始まった「具体美術協会」は二〇〇四年に兵庫県立美術館で大規模な回顧展を開いている。あるときは前衛的、あるときは伝統的に、様々なジャンルを縦横無尽に超え、美術館という既成的枠の中に収まりようも無いこの運動を、だが、納めてみようとすることの意味への問いというのが考えさせられるところである。美術館や博物館といった伝統的なアーカイヴ機能の存在に現代アート自身が挑発的に対向してくる時代があったが、現在となると、意識的な対決も消え、ゆらりゆらりとしている。流通し消費される「アート」、エフェメラな「アート」、あるいは、既にデジタル化、アーカイヴ化されたかのような「アート」、アーキヴィストにとっては手強い相手がどんどん生まれている。何を何のためにアーカイヴするのか、会議が白熱した。

私も末席ながら話す機会があった。アーキヴィストの役割は伝えられてきたものを後世に残して行く仕事である。後世に物事を伝える役割を負った組織や人は、美術館や博物館などの組織の他にも古来から存在した。だが、それらの様々な人や組織が、現代的なアーキヴィストのような考え方を持っていた訳ではないし、また、百戦錬磨伝えることに成功してきたわけでもない。一方で、現代的な美術館や博物館、アーカイヴの考え方が、これらの先人に対してとりわけ優れているわけでもない。

伝えられてきたものを後世に伝えるためには、どのような条件が必要か、と問われたとき私の頭に浮かぶ言葉は偶然と奇跡である。私が大阪市立大学在職時代に担当した、大阪市の昭和一七年撮影の航空写真は、全体で約三千カットほどで、北は京都大山崎近辺から、北は堺市、岸和田近辺まで、西は神戸、東は生駒山近辺までおさめた大規模なものである。軍事施設などのピンポイントを撮影したものではなく、広域を網羅的に撮影したものであるということでは大変珍しいものである。大阪の空襲前の古いたたずまいを後世に残す貴重な資料でもあるのだ。このような戦時中の資料は全国的に沢山あったと推察されるが、撮影には軍が関与しているこ



大阪市昭和17年の航空写真
（大阪市都市計画局所蔵、接続作業 大阪市立大学＋森洋久）

とは容易に想像でき、終戦と同時にくまなく焼却処分されたと言われている。

厳重に管理されたと思われるこのような資料をなぜいま見ることができるのだろうか。十数年前に大阪市役所の片隅でぼろぼろになって放置されていたところを発見された。おそらく話は簡単だ。この資料を規則に反して返却し忘れた人が居たのだろう。機密資料を持ち出そうなどと反軍的なイデオロギーを持っていたわけではない。もしやそんなことを思っていたならば、当局によってあっという間に処分されたに違いない。単に問がさしただけである。貴重な資料を我々が手に取るために必要だったことは、あのとき、彼にさしてきた小さな「間」だった。

一人の人や組織の忘却のサイクルは、長くても数十年、百年である。対して、社会的なパラダイムの変化や自然現象は数百年、数千年といったスパンでやってくる。このような長時間サイクルを乗り越え後世に伝えられるものはまれである。三月一一日の東北大震災はそのことをまざまざと教えてくれる。大きな津波は古くからあったわけで、その度に神社の社は流された。数百年をかけて、村人たちは安全な場所へとの思いで知らず知らずと、社を山の方の高い方へ移して行った。結果的に古い社は今回の大津波から免れたものが多い。長い月日の中で文書は失われ、石碑は忘れられるが、社の祭りは、神輿を担架や荷車に持ち替え有事に機能する。国立民族博物館企画展「記憶をつなぐ」（二〇一二年九月二七日～一一月二七日）が示唆するところは、神社と行事は単なる観光資源ではなく、人々が集い生き続けている限り、メッセージは彼らの体内に込められ伝えられるということだ。だが、この行事も近年の急速な都市化の流れのなかで失われつつあることも事実だ。

我々の目の前にある貴重な史料がなぜここにあるか。絶えず押し寄せる偶然と奇跡のなか、フットボール選手のようにボールを受け継いできた果敢な先人たち。デジタル化技術など様々なアーカイヴの技術は現代風に進化しているが、これらを駆使して出来ることはなにか。我々に出来ることは、少し後の未来へ繋ぐお手伝いの程度である。

そんな無力な我々が、それでもなぜアーカイヴを試みるのか。このように思うとアーカイヴそのものがアートに見えてくる。

（国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授）

共同研究

（二〇一二年一〇月一日～二〇一三年三月三一日）

文明と身体

（研究代表者　牛村　圭、幹事　劉　建輝）

〔共同研究員名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川本玲子、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、竹村民郎、永井久美子、西原大輔、平松隆円、古川優貴、山中由里子、稲賀繁美、井上章一、白幡洋三郎、郭南燕、フレデリック・クレインス、堀まどか、楊爽

〔海外共同研究員名〕

眞嶋亜有

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉「『心身／身心』と『環境』の哲学」との共同開催

二〇一三年一月二六日

伊東貴之「今回の共同研究会・共催の趣旨説明、その他」

牛村　圭「共同研究会『文明と身体』班の趣旨、総括と展望など」

フレデリック・クレインス、加藤めぐみ、古川優貴「事例研究」

田尻祐一郎「『心』をめぐる伊藤仁斎と闇斎学派」

総合討論

二〇一三年一月二七日

鈴木貞美「身体論から生命観の探究へ―わたしの場合」

総合討論

〈第三回研究会〉

二〇一三年三月三〇日

牛村　圭「本共同研究会の今後」
竹村民郎、井上章一「対論　終末医療とケアハウス問題：文明と身体の視点から」
全体討論

人文諸学の科学史的研究

〔研究代表者　井上章一、幹事　瀧井一博〕
〔共同研究員名〕
今谷明、上島享、上村敏文、鵜飼正樹、内田忠賢、長田俊樹、小路田泰直、斎藤成也、関幸彦、高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、藤原貞朗、シルヴィオ・ヴィータ、安田敏朗、若井敏明、大塚英志、林淳、荒木浩、伊東貴之、倉本一宏

〔研究発表〕
〈第三回研究会〉
二〇一二年一一月三日
井上章一「岡倉天心は、どう時代をわけたのか―室町時代へのまなざし―」
高木博志「『日本美術史』と近代京都像」
二〇一二年一一月四日
藤原貞朗「『天心』の息子たち―瀧精一、濱田耕作、矢代幸雄―」
〈第四回研究会〉
二〇一三年一月八日
玉木俊明「二人のO（大塚と越智）とその影響―東京と京都の歴史学―」
質疑応答
井上章一「イギリス産業革命史と明治維新、中国史時代区分論と日本封建制成立をつなぐ赤い糸」
質疑応答
〈第五回研究会〉「『心身／身心』と『環境』の哲学」との共同開催
二〇一三年三月九日
伊東貴之「伝統中国をどう捉えるか？―『唐宋変革』説・『挫折』論・その他のポレミック」
井上章一「京都大学の東洋史学と照葉樹林文化論」
小島　毅「〈東アジア海域に漕ぎ出す〉ことの意義」
総合討論
〈第六回研究会〉
二〇一三年三月二八日

井上章一「日本建築の源流をめぐる諸学説」
斉藤成也「日本列島人成立に関する学説の東西対立」
二〇一三年三月二九日
安田敏朗「日本語系統論と国語学、言語学の起源」
長田俊樹「戦後における日本語系統論の展開」

日本庭園のあの世とこの世―自然、芸術、宗教

（研究代表者　白幡洋三郎、幹事　榎本　渉）

〔共同研究員名〕
小野健吉、鈴木久男、田中淡、豊田裕章、錦仁、原口志津子、原田信男、飛田範夫、日向進、水野杏紀、村井康彦、山田邦和、吉澤健吉、多田伊織、荒木浩、町田香、ウィーベ・カウテルト

〔海外共同研究員名〕
蔡敦達、陸留弟

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉
二〇一二年一一月九日
多田伊織「華林園の記憶―江南から大和へ」
水野杏紀「『作庭記』に記された四神相応と禁忌に関する考察―中国の『宅経』・『風水書』を踏まえて―」
榎本　渉「南北朝時代禅宗庭園の位置付け―夢窓派と幻住派―」
蔡　敦達「中世禅僧の境致認識―『扶桑五山記』を中心に」
陸　留弟、ウィーベ・カウテルト「討論」
二〇一二年一一月一〇日
原口志津子「幻の庭―本法寺蔵『法華経曼荼羅』化城喩品・提婆達多品を例として」
豊田裕章「平安時代、鎌倉時代における風景式庭園の系譜」
町田　香「平安貴族庭園のあそびとかざり」
小野健吉「庭園と浄土―『法然上人行状絵図』に見る九条兼実の月輪殿について」
原田信男「祭祀と饗宴の庭」
日向　進「『市中の山居』と路地」
白幡洋三郎「『日本庭園』の誕生と作庭記」
ウィーベ・カウテルト、陸　留弟、横山　正「討論」
二〇一二年一一月一一日
荒木　浩「四方四季と三時殿―日本古典文学の景観と庭をめぐって」

錦　仁「和歌を詠む庭園―前栽合を中心に」
飛田範夫「『作庭記』原本の再生」
〈第五回研究会〉
二〇一三年三月三日
蔡　敦達「十景、八景の中国における発生と展開」
『作庭記』写本紹介
二〇一三年三月四日
打ち合わせ「研究成果、出版について」

怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―

（研究代表者　小松和彦、幹事　山田奨治）
〔共同研究員名〕
カバット・アダム、今井秀和、香川雅信、木場貴俊、小林健二、近藤瑞木、齋藤真麻理、佐々木高弘、清水潤、志村三代子、高橋明彦、堤邦彦、常光徹、徳田和夫、永原順子、正木晃、安井眞奈美、横山泰子、大塚英志、飯倉義之、中野洋平、徳永誓子、魯成煥
〔海外共同研究員名〕
マーク・オンブレロ、朴銓烈、マティアス・ハイエク
〔研究発表〕
〈第三回研究会〉
二〇一二年一一月一七日
香川雅信「柳田国男の妖怪研究」
大塚英志「擬人化の書式―研究の設計図として」
伊藤慎吾「妖怪化と擬人化の境」
〈第四回研究会〉
二〇一三年一月一九日
朴　美暻「韓国の『ドッケビ』の視覚イメージの定着過程―一九六〇～八〇年代、日本の『オニ』との比較を手がかりに」
デ・アントーニ・アンドレア「幽霊の生産―現代日本のオカルトにおける、噂・現実・体験の構築過程」
徳田和夫「妖怪錦絵『當年十七歳　鬼娘』を読む―幕末の『口さけ女』・『猫股』と二尾獣」
〈第五回研究会〉
二〇一三年三月二三日
マイケル・フォスター「怖いもの見たさ：伝統と観光における見る／見せる関係の一考察」
魯　成煥「韓国の怨霊を祀った日本人」
安井眞奈美「学生たちの創った妖怪たち―付喪神からゆる

キャラまで」
総合討論
小松和彦「総括」

現代民俗研究方法論の学際的研究

（研究代表者　山　泰幸、幹事　小松和彦）

〔共同研究員名〕

石田佐恵子、岩本通弥、浮葉正親、門田岳久、阪本俊生、菅康弘、橋弘文、舩戸修一、法橋量、山中千恵、梁仁實、飯倉義之

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一二年一〇月一四日

浜日出夫「ジンメルの異人論―殺された異人はどこに行ったのか？」

阪本俊生「近代社会と知り合い関係の発達・・・親密性とストレンジャーのはざまについて」

菅　康弘「ストレンジャー体験と愛着の位相、そして『離れる』ことの意味」

質疑応答

〈第三回研究会〉

二〇一二年一一月二三日

梶谷真司「現象学から見た異人論―雰囲気の異他性と集合心性の形成」

法橋　量「ドイツ民俗学における異人観の系譜―フォルクとフレムデ（異人）の相克―」

コメント：小松和彦、岩本通弥、門田岳久

総合討論

司会：山　泰幸

〈第四回研究会〉

二〇一二年一二月二二日

山中千恵「日本製アニメの越境―金髪の美少女戦士はだれにとっての〈異人〉か？」

梁　仁實「日本の映像における植民地朝鮮～見えない『差異』を如何に見えるものにするか」

石田佐恵子「メディアの表象分析の可能性と限界～メディアの〈他者〉表象と〈共同体〉について～」

質疑応答

〈第五回研究会〉

二〇一三年二月一六日

門田岳久「移住者たちの郷土主義―南佐渡における『旅の者』と住民参加型地域開発」
舩戸修一「グリーン・ツーリズムにおける『まなざし』の交錯―大分県宇佐市安心院町の農泊の事例から―」
質疑応答
〈第六回研究会〉
二〇一三年三月三〇日
飯倉義之「妖怪の〈正体〉言説と異人観」
岩本通弥「異人から〈内なる異人〉へ」
マイケル・フォスター「来訪神行事に来訪する異人達：伝統の行方を考える」
魯　成煥「朝鮮女人を神にした日本人」
質疑応答

夢と表象―メディア・歴史・文化

〔研究代表者　荒木　浩、幹事　マルクス・リュッターマン〕
〔共同研究員名〕
安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛治恵、加藤悦子、河東仁、笹生美貴子、仙海義之、高橋文治、立木宏哉、玉田沙織、丹下暖子、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松薗斉、松本郁代、室城秀之、木村朗子、伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本渉、郭南燕、箕浦尚美、中川真弓
〔海外共同研究員名〕
ヨーク・B・クヴェンツァー、李育娟、イヴ・コヴァチ
〔研究発表〕
〈第四回研究会〉
二〇一二年一一月一七日
趣旨説明、打合せ
安東民兒「浄土教肖像画の中から」
堀　忠雄「入眠期の夢とレム睡眠の夢」
中間討議
二〇一二年一一月一八日
豊田由貴夫「パプアニューギニアにおける夢の民俗理論」
酒井紀美「夢見の場について」
総括
〈第五回研究会〉
二〇一三年一月二六日
金　哲会「対象世界の構築における言語の働きと表象―人間性の曙光を目指して」（一．象徴を操る動物―人間

と言語、二、言語の働きと表象）

玉田沙織「起源譚をめぐる夢―『大和物語』第百四十七段論―」

二〇一三年一月二七日

仙海義之「法然―親鸞の夢想―祖師絵伝が描く聖体示現」

建築と権力の相関性とダイナミズムの研究

（研究代表者　御厨　貴、幹事　井上章一）

〔共同研究員名〕

五十嵐太郎、池内恵、小宮京、佐藤信、砂原庸介、手塚洋輔、中村武生、奈良岡聰智、牧原出、松宮貴之、ウィーベ・カウテルト

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一二年一一月四日

砂原庸介「中心をめぐる政治力学―大阪府市の庁舎問関係」

松宮貴之「政治家の書―東洋的教養と政治との相関性」

〈第四回研究会〉

二〇一三年一月一二日

奈良岡聰智「『別荘』からみた近代日本政治」

五十嵐太郎「建築デザインは、どのように権力を表現するか」

〈第五回研究会〉

二〇一三年三月一八日

佐藤　信「無鄰庵再考―権力による空間利用についての予備的考察」

吉田雅史「政治家自邸の利用実態からみる公私の葛藤」

牧原　出「西下と東上―権力移動の政治と建築」

近代日本における指導者像と指導者論

（研究代表者　戸部良一、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

五百旗頭薫、猪木武徳、河野仁、黒澤文貴、佐古丞、佐藤卓己、庄司潤一郎、武田知己、中西寛、奈良岡聰智、野中郁次郎、畑野勇、波多野澄雄、小川原正道、楠綾子、牛村圭、鈴木貞美、松田利彦

〔海外共同研究員名〕

黄自進、フレデリック・ディキンソン

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉
二〇一二年一二月一日
佐藤卓己「『文化立国』日本におけるメディア論の欠如」
猪木武徳「デモクラシーと尚武の精神あるいはレジームと精神風土―トクヴィル、スミスから学ぶこと―」
二〇一二年一二月二日
奈良岡聰智「『八月の砲声』と日本―加藤高明外相のリーダーシップ再考」
全体討論「研究成果の発表に向けて」
〈第五回研究会〉
二〇一三年二月二日
武田知己「開戦前夜の駐英大使館―重光・吉田の対英工作と指導者像」
楠　綾子「安全保障政策の形成をめぐるリーダーシップ―知的コミュニティ、財界、メディアと自民党政権」
二〇一三年二月三日
黄　自進「密使・密約から見た佐藤栄作の人格的特質と政治指導」
全体討論

徳川社会と日本の近代化―一七～一九世紀における日本の文化状況と国際環境―

（研究代表者　笠谷和比古、幹事　佐野真由子）
〔共同研究員名〕
磯田道史、伊藤奈保子、岩下哲典、上村敏文、魚住孝至、大川真、加藤善朗、上垣外憲一、郡司健、小林龍彦、小林善帆、菅良樹、高橋博巳、武内恵美子、竹村英二、谷口昭、芳賀徹、長谷川成一、原道生、平井晶子、平木實、平松隆円、藤實久美子、前田勉、真栄平房昭、宮崎修多、宮田純、森田登代子、横谷一子、横山輝樹、米沢薫、脇田修、和田光俊、滝澤修身、辻垣晃一、伊東貴之、フレデリック・クレインス、瀧井一博、姜鶯燕、ウィーベ・カウテルト
〔研究発表〕
〈第四回研究会〉
二〇一二年一〇月二六日
高橋博巳「草場佩川の見た異国」
早川聞多「蕪村の文人画と春信の浮世絵―上方と江戸、雅と俗」
二〇一二年一〇月二七日

辻垣晃一「森幸安地図の体系化に向けて」
芳賀　徹「徳川家康歿後四百年記念―徳川文明展の構想」
岩下哲典「外圧と士（サムライ）と民衆」
総合討論
〈第五回研究会〉
二〇一二年一二月七日
ウィーベ・カウテルト「『隔蓂記』に見られる明正院御所の庭」
下郡　剛「幕末の琉球の日記―異国船来航記事をめぐって」
二〇一二年一二月八日
郡司　健「江戸後期の幕府・諸藩における西洋兵学受容と大砲技術―江川英龍の活動を中心として―」
和田光俊「『ラランデ天文書』による西洋天文学の受容」
大川　真「近世日本の王権論と政治のリアリズム―新井白石を中心に」
総合討論
〈第六回研究会〉
二〇一三年二月一五日
佐野真由子「持続可能な外交へ―幕末期、欧米外交官の将軍拝謁儀礼から―」
菅　良樹「外国奉行柴田剛中による神戸開港」
二〇一三年二月一六日
森田登代子「知のネットワークと地方へのまなざし―屋代弘賢『諸国風俗諸問状答』から―」
武内恵美子「藩校における楽の実施と『楽家録』」
総合討論

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―ザ・タイガースの研究

（研究代表者　磯前順一、幹事　井上章一）
〔共同研究員名〕
浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、柿田肇、金谷幹夫、中村俊夫、永岡崇、マイケル・ファーマノフスキー、藤本憲正、倉本一宏、細川周平、西田彰一
〔研究発表〕
〈第四回研究会〉
二〇一二年一二月一五日
磯前順一「加橋かつみ脱退とその後」
飯田健一郎「GSとフォークソングそして京都」

柿田　肇「GSファッションをめぐる考察」
経過報告
〈第五回研究会〉
二〇一三年二月一日
磯前順一「次年度の作業方針について」
永岡　崇「基礎資料の収集・整理について」
〈第六回研究会〉
二〇一三年三月二日
資料検討会
二〇一三年三月三日
細川周平「GS音楽論」
松本　清「ザ・タイガース未発表音源について」
磯前順一「加橋かつみとタイガース」
永岡　崇「ザ・タイガース基礎資料の現状と課題」

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言

（研究代表者　稲賀繁美、幹事　牛村　圭）
〔共同研究員名〕
テレングト・アイトル、鵜戸聡、大西宏志、小倉紀蔵、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、近藤高弘、戦暁梅、千葉慶、西田雅嗣、西原大輔、波嵯栄ジェニファしょう子、橋本順光、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソー、クリストフ・マルケ、本浜秀彦、山本麻友美、與那覇潤、李建志、渡邊淳司、張競、滝澤修身、中村和恵、朴美貞
〔海外共同研究員名〕
大橋良介、デンニッツァ・ガブラコヴァ
〔研究発表〕
〈第三回研究会〉
二〇一三年一月二六日
記述言語と対象―東西価値観の対峙と相克：修辞学と美術史学の周辺
テレングト・アイトル「東洋における修辞学の変遷―日中の修辞学の比較を兼ねて」
質疑応答
範　麗雅「『日本の眼』から『中国の眼』へ：ローレンス・ビニョン、アーサー・ウェイリーとR・H・ファン・フーリックの東洋画研究」
質疑応答

二〇一三年一月二七日
海洋史観の再検討：海賊行為と公権力（その1）
稲賀繁美「翻訳の政治学と全球化への抵抗：海賊史観による美術史にむけて」
質疑討論

万国博覧会とアジア
（研究代表者　佐野真由子、幹事　劉　建輝）
〔共同研究員名〕
石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、岩田泰、鵜飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、中牧弘允、芳賀徹、橋爪紳也、林洋子、武藤秀太郎、稲賀繁美、井上章一、瀧井一博、朴美貞、ウィーベ・カウテルト
〔海外共同研究員名〕
青木信夫、徐蘇斌
〔研究発表〕
〈第三回研究会〉
二〇一二年一一月二三日
江原規由「中国の改革　解放政策と上海万博」
中牧弘允「文明の万博―アジアを中心に」
討論「来年度以降の研究計画について」

日本文化形成と戦争の記憶
（研究代表者　セオドア・F・クック、幹事　鈴木貞美）
〔共同研究員名〕
浅田裕子、一ノ瀬俊也、ベティナ・グラムリヒ＝オカ、加藤陽子、河野仁、川村湊、窪島誠一郎、小菅信子、モーデカイ・シェフタル、庄司潤一郎、竹内栄美子、竹本知行、田辺明生、谷口幸代、田谷治子クック、坪井秀人、等松春夫、直野章子、中川成美、花崎育代、原剛、原山浩介、平瀬礼太、平野共余子、松竹京子、南誠、宮城晴美、本康宏史、横山篤夫、吉田裕、李建志、多田伊織、稲賀繁美、末木文美士、戸部良一、ジョン・ブリーン、磯前順一、郭南燕、佐野真由子、瀧井一博、劉建輝、堀まどか、石川肇
〈第二回研究会〉
二〇一二年一〇月二七日
劉　建輝「忘却された帝国の間・『蒙彊』―張家口の歴史と文化」
多田伊織「幸田露伴一家の戦争―幸田文・青木玉の記録と記憶」

平瀬礼太「戦争と美術的イメージ絵画を中心に」
二〇一二年一〇月二八日
直野章子「戦死者慰霊と原爆の記憶―広島の動員学徒をめぐって」
原山浩介「博物館と政治」
モーデカイ・シェフタル「『文化論』から見る戦後日本の戦争記憶言説空間」
〈第三回研究会〉
二〇一三年一月一二日
等松春夫「日中戦争イメージの変遷―メディアと戦争の記憶の形成」
谷口幸代「大庭みな子の文学と戦争の記憶」
竹内栄美子「起点としての戦争―中野重治の戦後文化運動」
二〇一三年一月一三日
庄司潤一郎「第二次世界大戦の記憶をめぐる日独比較」
田谷治子クック「『サイパン玉砕』神話のもつ意味」
ジョン・ブリーン「靖国神社と文化の記憶」
横山篤夫「陸軍墓地と戦没者」
郭　南燕「『731部隊』についての語りと記憶」
川村　湊「『日本文化形成と戦争の記憶』総括」

窪島誠一郎「『日本文化形成と戦争の記憶』総括」
原　剛「『日本文化形成と戦争の記憶』総括」
ベティナ・グラムリヒ＝オカ「『日本文化形成と戦争の記憶』総括」
堀まどか「『日本文化形成と戦争の記憶』総括」

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―

（研究代表者　伊東貴之、幹事　榎本　渉）
〔共同研究員名〕
青木隆、新井菜穂子、恩田裕正、垣内景子、片岡龍、権純哲、黒住眞、桑子敏雄、黄海玉、河野哲也、橋川智昭、小島毅、関智英、銭国紅、高橋博巳、竹村英二、田尻祐一郎、陳継東、土田健次郎、手島崇裕、永冨青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、鈴木貞美、ジョン・ブリーン、劉建輝、張翔
〔海外共同研究員名〕
陳健成、フレデリック・ジラール
〔研究発表〕
〈第四回研究会〉

二〇一二年一〇月二七日
張　翔「日本近世社会体制の危機と朱子学―丸山真男の徂徠論の再検討」
劉　建輝「身体表現の差異をめぐって―中日の比較による日本文化小論」
対論：井上章一
総合討論
二〇一二年一〇月二八日
水口拓寿「孔子の祭りに牛・羊（やぎ）・豕（ぶた）は無用か？：中華文化復興運動期の台湾における『礼楽』制定過程の一斑」
総合討論
〈第五回研究会〉
二〇一二年一二月八日
土田健次郎「朱熹の『論語集注』をめぐって―東アジアの論語学」
黒住　眞「朱子学的思想文化の諸地域でのあり方とその変容史いくつか」
〈第六回研究会〉「文明と身体」との共同開催
二〇一三年一月二六日
伊東貴之「今回の共同研究会・共催の趣旨説明、その他」
牛村　圭「共同研究会『文明と身体』班の趣旨、総括と展望など」
フレデリック・クレインス、加藤めぐみ、古川優貴「事例研究」
田尻祐一郎「『心』をめぐる伊藤仁斎と闇斎学派」
総合討論
二〇一三年一月二七日
鈴木貞美「身体論から生命観の探究へ―わたしの場合」
総合討論
〈第七回研究会〉「人文諸科学の科学史的研究」との共同開催
二〇一三年三月九日
伊東貴之「伝統中国をどう捉えるか？―『唐宋変革』説・『挫折』論・その他のポレミック」
井上章一「京都大学の東洋史学と照葉樹林文化論」
小島　毅「〈東アジア海域に漕ぎ出す〉ことの意義」
総合討論

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に

（研究代表者　鈴木貞美、幹事　伊東貴之）

〔共同研究員名〕
浅岡邦雄、阿毛久芳、荒川清秀、荒木正純、有馬学、磯部敦、井上健、今村忠純、岩月純一、王暁葵、岡田建志、梶山雅史、金子務、上垣外憲一、川島真、川尻文彦、衣笠正晃、木村直恵、権藤愛順、佐藤一樹、佐藤バーバラ、澤田晴美、全美星、須藤遙子、孫安石、孫江、高柳信夫、竹村民郎、竹本寛秋、田中比呂志、陳継東、陳捷、陳力衛、寺澤行忠、十重田裕一、仲万美子、中川成美、中嶋隆、野網摩利子、橋本行洋、林正子、兵藤裕己、平野健一郎、福井純子、増田周子、松田清、真鍋昌賢、村田雄二郎、リース・モートン、茂木敏夫、安田敏朗、安野一之、八耳俊文、山本美紀、吉岡亮、吉田比呂子、李梁、多田伊織、依岡隆児、小松和彦、稲賀繁美、磯前順一、郭南燕、フレデリック・クレインス、劉建輝、堀まどか、石川肇、韋立新、ハンス・マーティン・クレーマ

〔海外共同研究員名〕
馮天瑜、黄克武、麻国慶、章清、王中忱

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉
第四四回国際研究集会「東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討」
二〇一二年一一月一三日
鈴木貞美「東アジアにおける概念編制史研究の意義と展望」
章　清「新語と近代東アジア叙述の構築」
鄭　文惠「観念史の方法と中国研究」
許　洙「韓国における概念史研究の現状と展望」
李　漢燮「近代韓国語コーパスに現れた近代新概念の様子と定着過程」
全体討論
二〇一二年一一月一四日
ラインハルト・ツェルナー「『東アジア』を構築した思想的過程」
朴　賛勝「韓国における民族概念の成立」
李　憲昶「アジアにおいてPolitical economyの翻訳語として登場した諸用語の原義とその進化」
劉　建輝「阿片戦争以前の『概念』形成について―広州在住宣教師の翻訳活動を中心に」
呂　文浩「近代中国の優生学と人種概念」
孫　江「表象としての宗教―一八九三年シカゴ万国宗教

大会と中国」
夏　維中「明清交替と歴史の書き替え―陳於鼎の事例」
ペッカ・コルホーネン「アジアという概念」
二〇一二年一一月一五日
黄　克武「近代中国思想における『迷信』」
潘　光哲「『新語』からキーワードへ：『植民地』という概念を手がかりとして」
張　哲嘉「『重訂解体新書』の誤訳と歪曲」
李　梁「『白鹿洞書院学規』からみた近世東アジア『知』の空間―イエズス会の『学事規定』との比較において―」
田中比呂志「清末民初期の中国における『民族』概念の消長―自国史教科書の言説を中心に」
瀧井一博「象徴としての天皇―明治憲法下での議論」
吉田比呂子「日本における〈神話〉概念の創成」
木村直恵「〈社会〉以前と〈社会〉以後―明治期日本における〈社会〉概念と〈社会〉的想像の編成」
二〇一二年一一月一六日
金子　務「〈科学技術〉概念の成立」
マルクス・リュッターマン「『往来もの』の概念形成日本中近世における教育と礼法との関連について」
増田周子「明治期日本と〈国語〉概念の確立―文学者の言説をめぐって―」
依岡隆児「旧制高校からみた〈青春〉概念の形成」
寺澤行忠「日本文学にみる美的理念―子規の『古今集』評価をめぐって―」
リース・モートン「日本近代短歌における〈風景〉というキイ・コンセプトの再検討―前川佐美雄と大和」
東　晴美「芝居から演劇へ：演劇の概念の醸成に楽劇が果たした役割と伝統演劇の再評価」
多田伊織「言葉から実践へ　森鷗外晩年における『考証』の概念規定」
二〇一二年一一月一七日
総括討論
報告書の刊行について
〈第五回研究会〉
二〇一二年一二月一五日
鼎談「ラスキンの思想と田園都市」
竹村民郎「田園都市思想の一源流、ラスキン・モリス」
稲賀繁美「『芸術経済論』をめぐって」

鈴木貞美「文化史と経済史をつなぐ―ジョン・ラスキンとその影響」
堀まどか「ラスキン受容の概略―社会経済の倫理、そして象徴主義との関係―」
コメンテーター：宮本又郎

新大陸の日系移民の歴史と文化

（研究代表者　細川周平、幹事　瀧井一博）

〔共同研究員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、一政（野村）史織、粂井輝子、栗山新也、小嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高木（北山）眞理子、滝田祥子、竹村民郎、日比嘉高、松岡秀明、水野真理子、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、高橋勝幸

〔海外共同研究員名〕

根川幸男、エドワード・マック

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一二年一二月八日

アマゾン民族館（出羽庄内国際村）見学

インタビュー「山口吉彦館長をまじえて」

二〇一二年一二月九日

アマゾン自然館（月山あさひ博物村）見学

〈第五回研究会〉

二〇一三年一月一二日

栗山新也「越境的な芸能史をモノから考える―戦前の沖縄を中心に」

吉田裕美「語りのなかで構築されるハワイの『ローカル』」

討議「来年度の活動方針について」

日記の総合的研究

（研究代表者　倉本一宏、幹事　佐野真由子）

〔共同研究員名〕

蘭香代子、有富純也、池田節子、石田俊、板倉則衣、井原今朝男、今谷明、磐下徹、上島享、上野勝之、小倉久美子、小倉慈司、尾上陽介、加藤友康、久冨木原玲、小嶋菜温子、古藤真平、佐藤早紀子、佐藤信、佐藤全敏、佐藤泰弘、下郡剛、シャバリナ・マリア、末松剛、菅良樹、菅原昭英、瀬田勝哉、曽我良成、富田隆、中西和子、中町美香子、中村康夫、名和修、西村さとみ、畑中彩子、林友里

江、カレル・フィアラ、藤本孝一、古瀬奈津子、堀井佳代子、松薗斉、松田泰代、三橋順子、三橋正、森公章、山下克明、横山輝樹、吉川真司、吉川敏子、吉田小百合、近藤好和、荒木浩、稲賀繁美、井上章一、鈴木貞美、榎本渉、瀧井一博、マルクス・リュッターマン、門脇朋裕

〔海外共同研究員名〕

金恩淑、呉海航、鈴木多聞

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一二年一〇月二〇日

尾上陽介「記事の筆録態度にみる記主の意識について」

古瀬奈津子「藤原行成『権記』と『新撰年中行事』の前提として」

二〇一二年一〇月二一日

小倉慈司「日記逸文の記事改変の可能性についての検討」

堀井佳代子「西宮記にみえる日記の利用―『権記』を中心に―」

三橋　正「古記録の首書と目録―『小右記』『左経記』を中心に―」

三橋順子「『台記』に見る藤原頼長のセクシュアリティの再検討（その2）」

〈第五回研究会〉

二〇一二年一二月二二日

佐藤全敏「宇多天皇の文体2」

曽我良成「『鬱』の記録・・・平重盛の『鬱』を緒として・・・」

二〇一二年一二月二三日

榎本　渉「日文研所蔵『季瓊日録』について」

山下克明「具注暦の文化史―日記との関わりを中心として―」

上島　享「中世寺院における日記・記録・文書―勧修寺大経蔵からみえるもの―」

〈第六回研究会〉

二〇一三年二月二三日

吉川真司「『類聚世要抄』と中世寺院社会」

井原今朝男「室町期の奏事目録と綸旨・院宣・宣旨下知状」

二〇一三年二月二四日

荒木　浩「日記からの物語形成―中世説話集の方法―」

名和　修「『御堂関白記』の古写本について」

冷泉家見学

基礎領域研究

韓国語運用の基礎／応用（継続）
代表者　松田利彦
概　要　研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

近世風俗未公刊資料解読（継続）
代表者　早川聞多
概　要　センター所蔵の近世風俗資料の解読および変体仮名の解読演習を行う。

古文書研究（継続）
代表者　笠谷和比古
概　要　前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録などの読解を行う。

フランス語運用の基礎／応用（継続）
代表者　稲賀繁美
概　要　フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

文化論の基礎概念と方法（継続）
代表者　鈴木貞美
概　要　日本文化に関する国際的、学際的研究法の基本について、とりわけ、基礎概念および概念編成について研究を行う。

中国語運用の基礎／応用（継続）
代表者　郭　南燕
概　要　研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

日本宗教史基礎研究（継続）
代表者　末木文美士
概　要　日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議する。

宗教・文化の理論的研究（継続）
代表者　磯前順一
概　要　日本内外における宗教および文化に関する最新の理論的研究を取り上げ、文体の問題から、理論と感情の問題に至るまで幅広く考察する。

彙　報

（平成二四年一〇月一日～
平成二五年三月三一日）

人事異動

◉平成二四年一〇月一日　契約
外国人研究員　張　翔（復旦大学人文学院歴史系教授）
（客員）
外国人研究員　徐　勇（北京大学歴史学系教授）
◉平成二四年一〇月三一日　契約満了
外国人研究員　刘　岳兵（南開大学日本研究院教授）
◉平成二四年一一月一日　契約
外国人研究員　アンナ・ビクトロブナ・アンドレーワ（ハイデルベルグ大学カールヤスペルセンターアカデミックフェロー）
◉平成二五年一月一日　契約
外国人研究員　マイケル・ディラン・フォスター（インディアナ大学准教授）
◉平成二五年一月一四日　契約満了
外国人研究員　セオドア・フェイラー・クック（ウィリアム・パターソン大学教授）
◉平成二五年二月一日　契約
外国人研究員　チャン・ティ・ホアン・マイ（ベトナム社会科学院附属東北アジア研究院・情報図書センター所長）
◉平成二五年三月三一日　契約満了
外国人研究員　韋　立新（広東外語外貿大学東方語言文化学院院長・教授）
外国人研究員　金　哲会（北京語言大学教授）
外国人研究員　ソヨンボ・ボルジギン・ルブサンジャボン（チョイ・ルブサンジャブ言語文明大学教授）
外国人研究員　張　翔（復旦大学人文学院歴史系教授）
外国人研究員　クラティラカ・クマーラシンハ（ケラニヤ大学教授）
◉平成二五年三月三一日　定年退職
研究部教授　鈴木貞美
◉平成二五年三月三一日　辞職
研究部教授　宇野隆夫
◉平成二五年三月三一日　任期満了
（客員）
教授　林　淳（愛知学院大学文学部教授）
教授　近藤好和（國學院大學文学部兼任講師）
教授　依岡隆児（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授）
教授　山　泰幸（関西学院大学人間福祉学部教授）
准教授　多田伊織（皇學館大学大学院文学研究科非常勤講師）
准教授　小河原正道（慶應義塾大学法学部准教授）

日文研フォーラム

第二六〇回［平成二四年一〇月九日（火）］
発表者　シルヴィオ・ヴィータ（京都外国語

大学教授）
コメンテーター　末木文美士教授
テーマ　戦国の宗教文化と宣教師―大航海時代における異教の位置づけを考える―
第二六一回［平成二四年一一月六日（火）］
発表者　バルト・ガーンズ（フィンランド国際関係研究所研究員）
コメンテーター　佐野真由子准教授
テーマ　「汎ヨーロッパ」から「美の国」へ―クーデンホーフ＝カレルギーと日本―
第二六二回［平成二四年一二月一一日（火）］
発表者　韋　立新（広東外語外貿大学東方語言文化学院教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　鈴木貞美教授
テーマ　日本の中世文化を考える―上流階層における唐物趣味や禅趣味を中心に―
第二六三回［平成二五年一月一五日（火）］
発表者　クラティラカ・クマーラシンハ（スリランカ・ケラニア大学教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　荒木　浩教授
テーマ　スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇からの影響について
第二六四回［平成二五年二月一二日（火）］
発表者　張　翔（復旦大学歴史系教授／日文研外国人研究員）
コメンテーター　伊東貴之教授
テーマ　中日文化異同論の推移――近代以降の日本と欧米の学界を中心に
第二六五回［平成二五年三月一二日（火）］
発表者　マーク・コーディ・ポールトン（ヴィクトリア大学教授／日文研外国人来訪研究員）
コメンテーター　郭　南燕准教授
テーマ　日本演劇における「非人間的なるもの」との遭遇――霊・動物・テクノロジー

木曜セミナー

第一九一回［平成二四年一〇月一八日（木）］
話　者　牛村　圭教授
テーマ　陸上競技をどう語るか：日本のオリンピック参加一〇〇年を機に
第一九二回［平成二四年一一月二二日（木）］
話　者　マルクス・リュッターマン准教授
テーマ　文の面（つら）について
第一九三回［平成二四年一二月二〇日（木）］
話　者　小松和彦所長、白幡洋三郎教授、瀧井一博准教授、山内直樹（山内編集事務所代表）
テーマ　座談会「日文研二五年史編纂を振り返る」
第一九四回［平成二五年一月二四日（木）］
話　者　劉　建輝准教授
コメンテーター　郭　南燕准教授、松田利彦准教授
テーマ　書評「劉建輝著『日中二百年―支え合う近代』（東アジア叢書、二〇一二年）」
第一九五回［平成二五年二月二一日（木）］
話　者　堀まどか機関研究員
コメンテーター　三原芳秋（同志社大学准教授）
テーマ　二〇世紀初頭の俳句・能の海外発信――「二重国籍」詩人・野口米次郎のもた

らしたもの

Nichibunken Evening Seminar

第一七一回［平成二四年一〇月四日（木）］
発表者　クラティラカ・クマーラシンハ（スリランカ・ケラニア大学教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Noh Drama as a Vehicle for Spreading Shintoism and Buddhism in Medieval Japan

第一七二回［平成二四年一一月八日（木）］
発表者　ヨーン・ボルプ（デンマーク・オーフス大学准教授）
テーマ　Aloha Buddha and Bounty Zen: Global, Transnational, and Ethnic Buddhism in a Hawaiian Diaspora Context

第一七三回［平成二四年一二月六日（木）］
発表者　カセム・ズガリ（フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究者／日文研外国人研究員）
テーマ　Common Points between the Classical Martial Art of Japan and the European Art of Fighting

第一七四回［平成二五年二月七日（木）］
発表者　ウィーベ・カウテルト（ソウル国立大学環境大学院准教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Kyoto's Old Cherries are More Beautiful than the New: How and Why?

第一七五回［平成二五年三月七日（木）］
発表者　林　志宣（延世大学校教授／日文研外国人研究員）
テーマ　Inspiration and the Languages of Contemporary Music

レクチャー

第一三五回［平成二四年九月二八日（金）］
発表者　橋　柃（ウィーン大学専任教授）
テーマ　〈間〉の場―相互干渉・相互浸透の場　国際間における現代の比較思想

第一三六回［平成二四年一二月三日（月）］
発表者　ケネス・ルオフ（ポートランド州立大学歴史学科教授）
テーマ　一九四〇年前後の朝鮮への日本人観光：観光促進と同化政策のはざまで

第一三七回［平成二四年一二月一五日（土）］
発表者　アムリディン・ベルディムロドフ（ウズベキスタン考古学研究所所長）、ゲナディ・ボゴモロフ（ウズベキスタン考古学研究所上級研究員）
テーマ　ウズベキスタンにおける近年の考古学調査

第一三八回［平成二五年三月一四日（木）］
発表者　ルチア・ドルチェ（ロンドン大学東洋アフリカ学院准教授）
テーマ　一九世紀後半の英国における日本仏教認識

学術講演会

第五二回［平成二五年三月八日（金）］
講演者　宇野隆夫副所長
テーマ　私の未来的人文学―考古学ＧＩＳから時空間情報科学へ―
講演者　鈴木貞美教授

テーマ　日文研の二五年を振りかえって
司　会　早川聞多教授

公開講演会

【第四四回国際研究集会】［平成二四年一一月一三日（火）］
テーマ　東アジアにおける概念研究の現在
基調報告　東アジアにおける概念編制史研究の意義と展望
講演者　鈴木貞美教授
講　演　新語と近代東アジア叙述の構築
講演者　章　清（復旦大学歴史系教授）
講　演　観念史の方法と中国研究
講演者　鄭　文惠（台湾政治大学文学院教授）
講　演　韓国における概念史研究の現状と展望
講演者　許　洙（翰林大学翰林科学院教授）
講　演　近代韓国語コーパスに現れた近代新概念の様子と定着過程
講演者　李　漢燮（高麗大学日語日文学科教授）
司　会　劉　建輝准教授

伝統文化芸術総合研究プロジェクト

【『忠臣蔵』の世界】［平成二五年二月二八日（木）］
講　演　赤穂事件と『忠臣蔵』の世界
講演者　笠谷和比古教授
司　会　佐野真由子准教授
上　演　『仮名手本忠臣蔵』三段目「殿中刃傷の段」
演　者　義太夫　竹本相子大夫、三味線　竹澤團吾

国際研究集会

第四四回［平成二四年一一月一三日（火）～一七日（土）］
テーマ　東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討
研究代表者　鈴木貞美教授
参加者　八七名（国内七五名、国外一二名）

シンポジウム

第一一〇回［平成二四年一一月一〇日（土）～一一日（日）］
主宰者　稲賀繁美教授
テーマ　近代アジアをめぐる絵ハガキメディア―帝国・表象・ネットワーク
参加者　五二名（国内五一名、国外一名）
第一一一回［平成二四年一二月八日（土）］
主宰者　末木文美士教授
テーマ　近代仏教―トランスナショナルな視点から
参加者　二〇名（国内一九名、国外一名）
第一一二回［平成二四年一二月八日（土）～九日（日）］
主宰者　フレデリック・クレインス准教授
テーマ　日蘭関係史をよみとく―蘭学を中心に―
参加者　三四名（国内三二名、国外二名）
第一一三回［平成二五年三月一五日（金）］

主宰者　劉　建輝准教授
テーマ　近代日本と華北――文化交流からの再検証
参加者　二一名（国内二一名）

海外研究交流シンポジウム

第一〇回［平成二五年二月二八日（木）～三月一日（金）］
テーマ　中国の日本認識と日本の中国認識
場　所　復旦大学文史研究院
代表者　末木文美士教授
参加者　一二名（国内五名、国外七名）

一般公開

［平成二四年一一月一日（木）］
【セミナー】
テーマ　海の彼方から見た日本
講　師　フレデリック・クレインス准教授、劉　建輝准教授
司　会　マルクス・リュッターマン准教授
【シンポジウム】
テーマ　Spiritual Japan―霊的な日本―
話　者　韋　立新（広東外語外貿大学教授／日文研外国人研究員）、金　哲会（北京語言大学教授／日文研外国人研究員）、魯　成煥（蔚山大学校教授／日文研外国人研究員）
司　会　ジョン・ブリーン教授
【特別企画】
テーマ　私の江戸時代
発表者　笠谷和比古教授、伊東貴之教授
司　会　井上章一教授

会議

運営会議

第二九回　平成二四年一二月二一日（金）
第三〇回　平成二五年　三月一五日（金）

調整会議

第一七五回　平成二四年一〇月　三日（水）
第一七六回　平成二四年一〇月一七日（水）
第一七七回　平成二四年一一月　七日（水）
第一七八回　平成二四年一一月二一日（水）
第一七九回　平成二四年一二月　五日（水）
第一八〇回　平成二四年一二月一九日（水）
第一八一回　平成二五年　一月　九日（水）
第一八二回　平成二五年　一月二三日（水）
第一八三回　平成二五年　二月　六日（水）
第一八四回　平成二五年　二月二〇日（水）
第一八五回　平成二五年　三月　六日（水）
第一八六回　平成二五年　三月一八日（月）

センター会議

第一七五回　平成二四年一〇月　四日（木）
第一七六回　平成二四年一〇月一八日（木）
第一七七回　平成二四年一一月　八日（木）
第一七八回　平成二四年一一月二二日（木）
第一七九回　平成二四年一二月　六日（木）
第一八〇回　平成二四年一二月二〇日（木）
第一八一回　平成二五年　一月一〇日（木）
第一八二回　平成二五年　一月二四日（木）
第一八三回　平成二五年　二月　七日（木）
第一八四回　平成二五年　二月二一日（木）
第一八五回　平成二五年　三月　七日（木）
第一八六回　平成二五年　三月二二日（金）

外国人来訪者

平成二四年

一〇月一八日　ライン・ラウド（ＥＡＪＳ会長／ヘルシンキ大学教授）

一一月六日　村上ジルー栄（アルザス・欧州日本学研究所副所長）、シャル・サンドラ（ストラスブール大学日本学科長／アルザス・欧州日本学研究所運営顧問）

一一月七日　カウコ・ライティネン（日本フィンランドセンター所長）、［日本フィンランドセンター財団理事会］サトゥ＝マリア・アホ（インストゥルメンタリウム・デンタル社）、ペッカ・コルヴェンマー（アールト大学教授）、マルック・ロウトネン（ヘルシンキ大学教授）、ヨルマ・マッティネン（オーボ・アカデミー大学学長）、マッティ・ラウティオラ（ビルディング・インフォメーション社）、カレルヴォ・ヴァーナネン（トゥルク大学学長）、ティーア・サーリネン（ヘルシンキ大学研究リエゾンオフィサー）、［日本フィンランドセンター］ウッラ・キンヌネン（文化・コミュニケーション担当マネージャー）

海外渡航

磯前順一　准教授

目　的　ルール大学、チューリッヒ大学、ペンシルバニア大学等にて講義、研究打合せ及び資料調査

目的国　ドイツ、スイス、アメリカ

期　間　平成二四年一〇月二日～一二月三日

稲賀繁美　教授

目　的　台湾大学にてシンポジウム出席、発表及び資料調査

目的国　台湾

期　間　平成二四年一〇月五日～一〇日

小松和彦　所長

目　的　ジャワハルラル・ネルー大学にて講義及び研究指導

目的国　インド

期　間　平成二四年一〇月六日～二七日

井上章一　教授

目　的　復旦大学にて学術講演及び情報収集

目的国　中国

期　間　平成二四年一〇月一七日～二三日

細川周平　教授

目　的　英和大学にてシンポジウム出席及び発表

目的国　韓国

期　間　平成二四年一〇月一八日～二一日

鈴木貞美　教授

目　的　オハイオ州立大学、西ワシントン大学にて講演

目的国　アメリカ

期　間　平成二四年一〇月一一日～一九日

荒木　浩　教授

目　的　コロンビア大学にて講演、情報収集及び資料調査

目的国　アメリカ

期　間　平成二四年一〇月二三日～二九日

山田奨治　教授

目　的　ハーバード大学にて資料調査

目的国　アメリカ
期　間　平成二四年一一月三日～一二月一三日

鈴木貞美　教授
目　的　北京外国語大学にて講演
目的国　中国
期　間　平成二四年一一月二日～五日

白幡洋三郎　教授
目　的　ニュンベルク市立文書館、フランクフルト都市史博物館にて資料調査
目的国　ドイツ
期　間　平成二四年一一月一五日～二〇日

佐野真由子　准教授
目　的　漢陽大学校にてシンポジウム出席、発表及び研究打合せ
目的国　韓国
期　間　平成二四年一一月二四日～二六日

荒木　浩　教授
目　的　台湾大学にて講義
目的国　台湾
期　間　平成二四年一一月二八日～一二月二日

郭　南燕　准教授
目　的　上海図書館にて資料調査
目的国　中国
期　間　平成二四年一一月二八日～一二月四日

鈴木貞美　教授
目　的　四川外語学院日本学研究所にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二四年一一月三〇日～一二月四日

磯前順一　准教授
目　的　成均館大学にてシンポジウム出席及び発表
目的国　韓国
期　間　平成二四年一二月七日～九日

松田利彦　准教授
目　的　スタンフォード大学、カリフォルニア大学、ホーネット博物館等にて資料調査
目的国　アメリカ
期　間　平成二四年一二月六日～一四日

劉　建輝　准教授
目　的　北京大学にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二四年一二月一〇日～一三日

瀧井一博　准教授
目　的　オーストリア国立公文書館、ウィーン大学にて資料調査及び研究打合せ
目的国　オーストリア
期　間　平成二四年一二月一一日～一六日

荒木　浩　教授
目　的　崇実大学校にて学会出席
目的国　韓国
期　間　平成二四年一二月一四日～一八日

山田奨治　教授
目　的　ハーバード大学にて資料調査
目的国　アメリカ
期　間　平成二四年一二月一九日～平成二五年一月二七日

郭　南燕　准教授
目　的　オタゴ博物館、カンタベリー博物館、ネルソン郷土博物館等にて資料収集
目的国　ニュージーランド
期　間　平成二四年一二月二〇日～平成二五年一月四日

白幡洋三郎　教授
目　的　国際交流基金ベトナム日本文化交流センター、ベトナム社会科学院、ベトナム国家大学等にて研究打合せ
目的国　ベトナム
期　間　平成二五年一月一四日～一八日

倉本一宏　教授
目　的　国際交流基金ベトナム日本文化交流センター、ベトナム社会科学院、ベトナム国家大学等にて情報収集及び現地下見
目的国　ベトナム
期　間　平成二五年一月一四日～一八日

劉　建輝　准教授
目　的　国際交流基金ベトナム日本文化交流センター、ベトナム社会科学院、ベトナム国家大学等にて情報収集及び現地下見
目的国　ベトナム
期　間　平成二五年一月一四日～一八日

松田利彦　准教授
目　的　国立中央図書館、韓国国会図書館、洪裕陵にて資料調査
目的国　韓国
期　間　平成二五年一月三〇日～二月四日

小松和彦　所長
目　的　高麗大学校にて学会出席及び発表
目的国　韓国
期　間　平成二五年一月三一日～二月二日

山田奨治　教授
目　的　ハーバード大学にて資料調査
目的国　アメリカ
期　間　平成二五年一月三一日～三月三一日

郭　南燕　准教授
目　的　上海図書館、宝山区文化館、嘉定区文化館等にて資料調査
目的国　中国
期　間　平成二五年二月四日～一八日

稲賀繁美　教授
目　的　国立美術史研究所にてシンポジウム出席、オルセー美術館にて資料調査
目的国　フランス
期　間　平成二五年二月二〇日～二七日

伊東貴之　教授
目　的　復旦大学文史研究院にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二五年二月二六日～三月二日

末木文美士　教授
目　的　復旦大学文史研究院にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二五年二月二六日～三月二日

榎本　渉　准教授
目　的　復旦大学文史研究院にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二五年二月二六日～三月二日

劉　建輝　准教授
目　的　復旦大学文史研究院にてシンポジウム出席及び発表
目的国　中国
期　間　平成二五年二月二六日～三月二日

瀧井一博　准教授
目　的　復旦大学文史研究院にてシンポジウム出席及び発表、中国社会科学院、天津社会科学院にて資料調査及びレクチャー
目的国　中国
期　間　平成二五年二月二六日～三月五日

荒木　浩　教授
目　的　イェール大学にてワークショップ出席及び発表
目的国　アメリカ
期　間　平成二五年二月二七日～三月四日

佐野真由子　准教授
目　的　ブカレスト大学日本研究センターにてシンポジウム出席及び発表
目的国　ルーマニア
期　間　平成二五年三月一日～六日

笠谷和比古　教授
目　的　ブカレスト大学日本研究センターにてシンポジウム出席及び発表、コンスタンツァ歴史博物館にて資料調査
目的国　ルーマニア
期　間　平成二五年三月一日～八日

磯前順一　准教授
目　的　シンガポール国立大学アジア研究所にてワークショップ出席及び発表
目的国　シンガポール
期　間　平成二五年三月五日～一〇日

白幡洋三郎　教授
目　的　ドレスデン市立文書館、ドレスデン州立文書館にて資料調査
目的国　ドイツ
期　間　平成二五年三月八日～一四日

細川周平　教授
目　的　ブラジル日本移民史料館、サンパウロ人文科学研究所にて資料調査
目的国　ブラジル
期　間　平成二五年三月一〇日～四月八日

小松和彦　所長
目　的　中央大学校、漢陽大学校にて講義
目的国　韓国
期　間　平成二五年三月一二日～一四日

稲賀繁美　教授
目　的　中央研究院人文社会科学研究センターにてシンポジウム出席及び発表
目的国　台湾
期　間　平成二五年三月一七日～二〇日

鈴木貞美　教授
目　的　中央研究院人文社会科学研究センターにてシンポジウム出席及び発表
目的国　台湾
期　間　平成二五年三月一七日～二〇日

劉　建輝　准教授
目　的　中央研究院人文社会科学研究センターにてシンポジウム出席及び発表
目的国　台湾
期　間　平成二五年三月一七日～二〇日

倉本一宏　教授
目　的　山東工商学院（大学）東アジア社会

発展研究院にて講演及び総研大説明会
目的国　中国
期　間　平成二五年三月一九日～二二日
パトリシア・フィスター　教授
目　的　マンチェスター・グランド・ハイアット・サンディエゴにてシンポジウム出席
目的国　アメリカ
期　間　平成二五年三月二一日～二六日

劉　建輝　准教授
目　的　遼寧大学にて研究打合せ及び資料調査
目的国　中国
期　間　平成二五年三月二六日～三〇日

訃報

片倉もとこ本センター元所長・名誉教授が、二〇一三年二月二三日に逝去されました。享年七五。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

所員活動一覧（二〇一二年一〇月一日～二〇一三年三月三一日）

荒木　浩

●著書

『高等学校 新訂国語総合　現代文編』『高等学校 新訂国語総合　古典編』『高等学校 国語総合』『高等学校 標準国語総合』『高等学校 新編国語総合』（共著）第一学習社　二〇一三年二月

●論文

「〈非在〉する仏伝―光源氏物語の構造」谷知子・田渕句美子編著『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院　二〇一二年一〇月

「読めないテクスト『和語』で書くこと―源隆国の『安養集』遣宋と『宇治大納言物語』をめぐって」中国日語教学研究会会刊、中国外語類核心期刊『日語学習与研究』二〇一二・六　北京報刊発行局　二〇一二年一二月

●その他の執筆活動

「ふるさとの空はどっち?」『まほら』第七三号　旅の文化研究所　二〇一二年一〇月

「フロンティア列伝　古典に記された夢を追う」（インタビュー）朝日新聞（夕刊）　二〇一二年一一月七日

「国立国会図書館関西館開館一〇周年記念国際シンポジウム　図書館サービスとe戦略」『国立国会図書館月報』六二四号　二〇一三年三月

伊東貴之

●論文

「中国思想史における『有』と『無』をめぐる諸問題・覚書」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集―法華仏教と関係諸文化の研究―』山喜房佛書林　二〇一三年二月

「戦後日本の中国思想史研究の諸傾向についての一考察――主として、島田虔次と溝口雄三の両氏を例として」『「中国的日本認識・日本的中国認識」学術討論会論文集』復旦大学文史研究院・国際日本文化研究センター主催、復旦学報共催　二〇一三年二月

●その他の執筆活動

「『本命』莫言・ノーベル賞の必然性と政治性――日中関係、多難の年、着実な翻訳・紹介も進む　海外文学・文化回顧：中国」『図書新聞』第三〇九一号　二〇一二年一二月二二日号

「書評　今こそ『歴史を鑑に未来に』歩むべき時――日中国交回復四十周年の節目の年を経て：『日中関係史　一九七二―二〇一二』Ⅰ　政治（高原明生・服部龍二編）、Ⅱ　経済（服部健二・丸川知雄編）、Ⅲ　社会・文化（園田茂人編）」『週刊読書人』第二九七九号　二〇一三年三月一日号

磯前順一

●著書

『日文研叢書五〇　植民地朝鮮と宗教―帝国史・国家神道・固有信仰』（尹海東と共編）三元社　二〇一三年一月

●論文

「固有名のもとに――多重化する近代仏教――」田中雅一・小池郁子編『コンタクトゾーンの人文学第Ⅲ巻』晃洋書房　二〇一二年一〇月

“The Concepts of Religion and Religious Studies in Transcultural Contexts, with a Focus on Japan,” Inken Prohl and John Nelson eds, *Handbook of Contemporary Japanese Religions*, trans. by Tim Graf, Brill, 2012.

“The Recent Tendency to ‘Internationalize’ Shinto: Considering the Future of Shinto Studies,” with Jang Sukman *Asiatische Studien / Etudes Asiatiques* LXVI-4, 2012.

「論・談　世界が日本を見つめている――傷ついたアイデンティティから」『中外日報』二〇一三年一月三日

「震災後の日本で宗教を語ること――『宗教概念あるいは宗教学の死』の後に」『ＵＰ』四八三号　東京大学出版会　二〇一三年一月

「公共宗教論の陥穽――『宗教概念あるいは宗教学の死』の後で」『現代思想』二〇一三年一月号　青土社

●その他の執筆活動

「GS, I Love You ――新規共同研究『昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析――ザ・タイガースの研究』」*Nichibunken*

Newsletter No. 85　二〇一二年九月

「『野の道』を歩くということ　山尾三省著『インド巡礼日記』他」『図書新聞』第三〇八八号　二〇一二年一二月

"The Conceptual Formation of the Category 'Religion' in Modern Japan: Religion, State, Shintō," *Journal of Religion in Japan*, Volume 1, Issue 3, 2012.

「崩れた真理性こそ宗教の可能性を切り開く『ラジオ・カフェ・デ・モンク〜インタビュー集』」『図書新聞』第三一〇四号　二〇一三年三月

稲賀繁美

● 著書

The 43rd International Research Symposium Pour un Vocabulaire de la Spatialité Japonaise, Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemi eds., International Research Center for Japanese Studies, March 2013.

● 論文

「東アジアの陶藝はどこにゆくのか」『あいだ』一九七号（連載第九〇回）　二〇一二年一〇月

"Kegon/Huayan 華厳 View and Contemporary East Asian Art—A Methodological Proposal—," *Cross Sections* Vol. 5, The National Museum of Modern Art, Kyoto, 2012.

「『バッタモン』の再来 Battamon Returns ——翻訳の政治学と全球化への抵抗（1）」『あいだ』一九八号（連載第九一回）　二〇一二年一二月

「『バッタモン』の再来 Battamon Returns ——翻訳の政治学と全球化への抵抗（2）」『あいだ』一九九号（連載第九二回）　二〇一三年一月

일본 미술에서의 양」『문화로 읽는 십이지신 이야기・양』서울・도서출판 열림원, 2013 년 1월（韓国語訳）「日本の美術表現にみる羊」『文化で読む十二支神物語　羊』ソウル・図書出版　ヨルリムウォン　二〇一三年一月

「日本の美術表現にみる蛇——祝您蛇年快楽」『あいだ』二〇〇号（連載第九三回）　二〇一三年二月

「観光案内に載らないパリ案内（前）——日曜日と月曜日、たった二日で廻れる、知られざる街中の秘境」『あいだ』二〇一号（連載第九四回）　二〇一三年三月

《La Vie transitoire des formes. Un moment qui prend de la patine: une petite reflection sur les temps de la spatialité japonaise》, *The 43rd International*

Research Symposium Pour un Vocabulaire de la Spatialité Japonaise, Philippe Bonnin, Nishida Masatsugu et Inaga Shigemi eds., International Research Center for Japanese Studies, March 2013.

●その他の執筆活動

「パンドラの函の底には、まだ『希望』という名の『雑草』が芽吹いている――デンニッツァ・ガブラコヴァ著『雑草の夢――近代日本における「故郷」と「希望」』（本体四〇〇〇円、世織書房）を読む」『図書新聞』第三〇八二号（連載一三二）　二〇一二年一〇月

「エッセイ　ジャン＝レオン・ジェロームの『仏陀』と『獅子』」『ジャポニスム研究　三二』ジャポニスム学会　二〇一二年一一月

「二〇一二年下半期読書アンケート」『図書新聞』第三〇九一号　二〇一二年一二月

「『バッタもん』現象の史的背景―その源流を輸出漆器の意匠に探る――交易の海賊史観にむけて：文明の海洋史観を超えて？（1）」『図書新聞』第三〇九五号（連載一三三）　二〇一三年一月

「淡水『紅毛城』――支配者交替劇に台湾史の縮図を見る――交易の海賊史観にむけて：文明の海洋史観を超えて？（2）」『図書新聞』第三〇九六号（連載一三四）　二〇一三年二月

「海上覇権とは何か？領域国家のヘゲモニーとしての国際秩序から脱却するために――交易の海賊史観にむけて：文明の海洋史観を超えて？（3）」『図書新聞』第三〇九七号（連載一三五）　二〇一三年二月

"Tracing over Surface, Gliding over Memories," *Dr. Shuji Okada Portfolio for the UK Exhibition "SHIZENGAKU,"* February, 2013.（「界面の軌跡・滑空する記憶」『「自然学」英国展　岡田修二作品目録』）

「（表紙写真掲載）パリ・ギメ美術館別館テラス　日本庭園前に置かれた観音石像（掌の上にお賽銭あり）」『あいだ』二〇一号　二〇一三年三月

井上章一

●著書

『霊柩車の誕生　増補新版』（朝日文庫）朝日新聞出版　二〇一三年一月

●その他の執筆活動

「日本人の忘れもの一五　名望家のつとめ」『京都新聞』　二〇一二年一〇月七日
「書評　ユルゲン・オッテン著『ファジル・サイ』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年一〇月一七日
「書評　原武史著『団地の空間政治学』」『週刊ポスト』二〇一二年一〇月二六日号
「書評　呉座勇一著『一揆の原理』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年一一月七日
「金髪幻想盛衰記」『週刊ポスト』二〇一二年一一月一六日号
「日本美人七変化！」『CARTA』一月号（冬号）　二〇一二年一一月
「再録　考古学が覆した、文献史学の古代巨利像」丸谷才一・池澤夏樹編『分厚い本と熱い本　毎日新聞「今週の本棚」二〇年名作選（二〇〇五～二〇一一）』毎日新聞社　二〇一二年一一月
「書評　芳澤勝弘著『「瓢鮎図」の謎』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年一一月二八日
「性風俗」『現代社会学事典』弘文堂　二〇一二年一二月
「現代の建築家・一〇　坂倉準三―モダンデザインに日本をにじませて―」『GA JAPAN』119　二〇一二年一一月
「書評　マイク・モラスキー著『呑めば、都』」『週刊ポスト』二〇一二年一二月七日号
「書評　栗原俊雄著『二〇世紀遺跡帝国の記憶を歩く』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一二年一二月一九日
「回顧二〇一二年　私の三冊」『日本経済新聞社』　二〇一二年一二月三〇日
「昭和の歌　私の選ぶ一曲　阪神タイガースの歌（六甲おろし）」『中央公論』二〇一三年一月号
「成人という言葉」『京（みやこ）まなびぃニュースレター』第三号　二〇一三年一月
「時代を超えた『王との縁組』のつらさ」『週刊文春』二〇一三年一月三日・一〇日新年特大号
「対話のカタチ五　日本人の『自立』とは」『京都新聞』　二〇一三年一月八日
「二〇一三年を乗り切るためにこれを読め！／性の東西をあじわう」『週刊ポスト』二〇一三年一月一一日号
「書評　朝日新聞中国総局著『紅の党』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一三年一月一六日
「バラックがかいま見せるもの――風俗と建築と」『今和次郎と考現学　暮らしの「今」をとらえた〈目〉と〈手〉』河出書房新社　二〇一三年

一月

「現代の建築家・一一　丹下健三―ローマへ道はつうじるか―」『GA JAPAN』120　二〇一三年一月
「書評　奥中康人著『幕末鼓笛隊』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一三年二月六日
「書評　亀井好恵著『女相撲民俗誌』」『週刊ポスト』二〇一三年二月二二日号
「書評　古賀義章著『飛雄馬、インドの星になれ』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一三年二月二七日
「スペシャル対談　井上章一×鹿島茂『僕たち、美魔女を研究しています』」『文藝春秋 SPECIAL』二〇一三年季刊春号
「書評　井上智勝著『吉田神道の四百年』」『日本経済新聞社』（夕刊）　二〇一三年三月二七日
「世界の日本研究とふれあって」『日文研』五〇号　二〇一三年三月
「現代の建築家・一二　谷口吉郎―ファシズムかナチズムか―」『GA JAPAN』121　二〇一三年三月

牛村　圭

●その他の執筆活動
「現代のことば　させていただきますとおっしゃられても」『京都新聞』（夕刊）　二〇一二年一〇月三〇日
「現代のことば　スポーツを語るむずかしさ」『京都新聞』（夕刊）　二〇一三年一月一〇日
「現代のことば　レーリーの謎」『京都新聞』（夕刊）　二〇一三年三月一二日

榎本　渉

●著書
『南宋・元代日中渡航僧伝記集成　附　江戸時代における僧伝集積過程の研究』勉誠出版　二〇一三年三月

●論文
「唐～元代における日中交通路の変遷」林立群主編『跨越海洋―「海上絲綢之路与世界文明進程」国際学術論壇文選』浙江大学出版社

二〇一二年八月

「長崎晧臺寺と福州鼓山―『日域洞上諸祖伝』撰述の背景―」『駒澤大學禪研究所年報』二四　二〇一二年一二月

「平安王朝と中国医学―一二世紀を中心に」『東京大学日本史学研究室紀要別冊　中世政治社会史論叢』二〇一三年三月

フレデリック・クレインス

●論文

「外国から見た江戸―一七世紀の江戸参府日記を中心に―」『理大科学フォーラム』二〇一三年四月号

●その他の執筆活動

[書評] "Confluences of Medicine in Medieval Japan: Buddhist Healing, Chinese Knowledge, Islamic Formulas, and Wounds of War," by Andrew Edmund Goble. In: *Monumenta Nipponica*, vol 67, no. 2, 2012.

倉本一宏

●著書

『藤原道長の日常生活』講談社　二〇一三年三月

●論文

「平安貴族社会における老い」『日本歴史』二〇一三年一月号（七七六）　吉川弘文館

●その他の執筆活動

「はがき通信」『日本歴史』二〇一二年一〇月号（七七三）　吉川弘文館

「摂関期古記録データベースをめぐって」『人間文化研究機構連携研究 正倉院文書の高度情報化研究シンポジウム　予稿集』二〇一三年一月

小松和彦

●著書

『新・日本学誕生―国際日本文化研究センターの２５年』（猪木武徳・白幡洋三郎・瀧井一博と共編）角川学芸出版　二〇一二年一〇月

『「伝説」はなぜ生まれたか』（単著）角川学芸文庫　二〇一三年三月

●その他の執筆活動

「夜叉ヶ池伝説」『劇場文化：夜叉ヶ池』SPAC-静岡県舞台芸術センター　二〇一二年九月

「わたしたちにとっての神さま」松尾恒一監修『みたい！しりたい！しらべたい！日本の神様絵図鑑　①願いをかなえる神さま』ミネルヴァ書房　二〇一二年一〇月

「鯰絵をめぐる断想」『HUMAN』vol. 03　平凡社　二〇一二年一二月

「あすへの話題」（連載）『日本経済新聞』（夕刊）二〇一三年一月八日、一月一五日、一月二二日、一月二九日、二月五日、二月一二日、二月一九日、二月二六日、三月五日、三月一二日、三月一九日、三月二六日

「山口昌男さんを悼む　道化的知識人として生きる」『東京新聞』（夕刊）中日新聞東京本社　二〇一三年三月一四日

「いざなぎ流とはなにか」「『いざなぎ流の研究』を書き終えて」「討論」（講演録「公開シンポジウム：いざなぎ流研究の新時代へ」）『東西南北2013　和光大学総合文化研究所年報』二〇一三年三月

佐野真由子

●論文

「『人類の無形文化遺産』になった祇園祭――文化は誰のものにされようとしているのか」『SEEDer』七号　二〇一二年一二月

「日本の近代化と静岡――幕臣たちとキリスト教と」上村敏文・笠谷和比古編『日本の近代化とプロテスタンティズム』教文館　二〇一三年三月

●その他の執筆活動

「東アジアの一大都市“Osaca”から考える」『漢陽大学日本学国際比較研究所・BK21日本文化研究特性化チーム共同主催国際シンポジウム「東アジア近代都市空間の表象」資料集』二〇一二年一一月
「人類の始まりと日本人の性文化：浮世絵春画はおもしろい」（講演録・座談会）『人間学研究』Vol. 13　京都文教大学人間学研究所　二〇一三年三月

白幡洋三郎

●著書
『新・日本学誕生―国際日本文化研究センターの25年』（猪木武徳・小松和彦・瀧井一博と共編）角川学芸出版　二〇一二年一〇月
『大名庭園　武家の美意識ここにあり（別冊太陽　日本のこころ二〇四）』（監修）平凡社　二〇一三年一月
『異邦人のまなざし第8輯　神』（監修）国際日本文化研究センター　二〇一三年三月
『日文研所蔵欧文図書所載　海外日本像集成』第3冊：一八七八～一八八〇（編集）国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

●その他の執筆活動
「諸国街歩き」『まほら』第七三号　旅の文化研究所　二〇一二年一〇月
「あとがき」猪木武徳・小松和彦・白幡洋三郎・瀧井一博編『新・日本学誕生―国際日本文化研究センターの25年』角川学芸出版　二〇一二年一〇月
「紅葉『狩り』定着　意外と最近」朝日新聞（大阪本社版・夕刊）二〇一二年一一月二二日
「第一八回旅の文化研究フォーラム　シンポジウム『鉄道とツーリズム』」（シンポジウム録）『研究報告』No. 22　旅の文化研究所　二〇一二年一二月
「自然美と防災」『造園連新聞』日本造園組合連合会　二〇一三年一月一日
「生きた総合芸術―大名庭園」「交際のカギは庭園にあり」「花畑と城」「江戸の大名庭園」「戸越公園」「清澄庭園」「江戸の消えた大名庭園、生き延びた大名庭園」他、「解説」『大名庭園　武家の美意識ここにあり（別冊太陽　日本のこころ二〇四）』平凡社　二〇一三年一月

「集う楽しみ」京都新聞社編『日本人の忘れもの―京都、こころ　ここに』二〇一三年二月
「対談　色・放談」（佐藤洋一郎と）『人と自然』五号　昭和堂　二〇一三年三月

鈴木貞美

●著書
『入門　日本近現代文芸史』平凡社新書　二〇一三年一月
『上海一〇〇年――日中文化交流の場所（トポス）』（李征と共編）勉誠出版　二〇一三年一月

●論文
「詩『伯林駅停車場』のことなど―与謝野晶子と大正生命主義（ロシア語訳）」論集『与謝野晶子の洋行』ロシア連邦極東大学　二〇一三年三月
「東アジア近現代の概念編制史研究の現在」鈴木貞美・劉建輝編『国際研究集会報告書第三一集　東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月
「日本の帝国大学制度―概念編制史研究の立場から」酒井哲哉・松田利彦編『国際研究集会報告書第四二集　帝国と高等学校―東アジアの文脈から』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月
「東アジアにおける『文』の概念をめぐる覚え書き」河野貴美子・Wiebke DENECKE 編『アジア遊学一六二　日本における「文」と「ブンガク」』勉誠出版　二〇一三年三月

●その他の執筆活動
「国際共同研究の二五年　第一回　ヴェネツィアで論じた谷崎の『美』」『産経新聞』（関西版）　二〇一二年一〇月二五日
「国際共同研究の二五年　第二回　オハイオの名翻訳者」『産経新聞』（関西版）　二〇一二年一一月二九日
「国際共同研究の二五年　第三回　カイロの日本文学サロン」『産経新聞』（関西版）　二〇一二年一二月二七日
「国際共同研究の二五年　第四回　フランスの和辻哲朗研究」『産経新聞』（関西版）　二〇一三年一月三一日
紹介「最後に伝えたいことがある」『朝日新聞』（大阪版）　二〇一三年二月一三日

「国際共同研究の二五年　第五回　中国の作家との交流」『産経新聞』（関西版）　二〇一三年二月二八日
「ありがとう、日文研」*Nichibunken Newsletter* No. 86　二〇一三年三月
「日本の神がみ」『異邦人のまなざし第8輯　神』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月
「国際共同研究の二五年第六回　豪州で『源氏』翻訳」『産経新聞』（関西版）　二〇一三年三月二八日

末木文美士

● 著書

『反・仏教学――仏教 vs. 倫理』ちくま学芸文庫　二〇一三年二月
『中世禅籍叢刊第一巻　栄西集』（編著）臨川書店　二〇一三年三月

● 論文

「宗教と自然」平川南編『環境の日本史1　日本史と環境―人と自然―』吉川弘文館　二〇一二年一〇月
「日本人の死生観はどのように形成されたか」『中央公論』二〇一三年一月号　二〇一二年一二月
"Introduction to the Symposium on Modernity and Buddhism," *The Eastern Buddhist*, 43, 2012.
「修羅の救い――夢幻能の構造と思想」『観世』平成二十五年一月号　檜書店
「高山寺蔵『五臓曼荼羅』　翻刻と研究」『平成二十四年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』　二〇一三年三月

● その他の執筆活動

「仏典に学ぶ」（連載）『朝日新聞』（大阪本社版・夕刊）　二〇一二年一〇月二九日、一一月二六日、一二月一七日、二〇一三年一月二八日、二月二五日、三月二五日
「栄西著作の発見と復元」名古屋市博物館・真福寺大須文庫調査研究会編『大須観音：いま開かれる、奇跡の文庫』大須観音宝生院　二〇一二年一一月
「書評　『いのちの思想』を掘り起こす」『宗教研究』八六巻三七四　日本宗教学会　二〇一二年一一月

「思想史の観点から見た日本仏教」（講演記録）『仏教史学研究』第五五巻第一号　二〇一二年一一月
「序」浄慧著、何燕生・井上浩一・齋藤智寛・渡部東一郎訳『生活禅のすすめ』山喜房仏書林　二〇一二年一二月
「震災後と仏教の語り」『サンガジャパン』Vol. 12　二〇一二年一二月
「現代仏教を考える」『塩山』七七　二〇一三年一月
「書評　アメリカ仏教」『大学出版』第九三号　大学出版部協会　二〇一三年一月
「『ゴミ屑』にならない言葉を」『宗教と現代がわかる本二〇一三』平凡社　二〇一三年三月
「心の奥底に迫る著者の孤独　宮柊二『宮柊二歌集』」東京大学新聞社編『東大教師　青春の一冊』信山社　二〇一三年三月

瀧井一博

●著書
『新・日本学誕生―国際日本文化研究センターの25年』（猪木武徳・小松和彦・白幡洋三郎と共編）角川学芸出版　二〇一二年一〇月

●その他の執筆活動
「書評　有泉貞夫著『私の郷土史・日本近現代史拾遺』歴史家の分際を踏まえた珠玉の史論」『環』vol. 51　藤原書店　二〇一二年一〇月
「書評　宮地正人著『幕末維新変革史（上・下）』」『日本経済新聞』　二〇一二年一一月一一日
「政治学の古典を読む（一）『政局』家か知の政治家か」『究』一一月号（通巻第二〇号）ミネルヴァ書房　二〇一二年一一月
「大元帥・明治天皇の誕生」『歴史読本』二〇一二年一二月号　中経出版
「はがき通信」『日本歴史』二〇一三年二月号（七七七）
「政治学の古典を読む（二）明治憲法の思想的源流」『究』二月号（通巻第二三号）ミネルヴァ書房　二〇一三年二月

戸部良一

●著書

『事例研究　日本と日本軍の失敗のメカニズム』（猪瀬直樹・菊澤研宗・小谷賢・戸高一成他と共著）中央公論新社　二〇一三年三月

●論文

「南進と大東亜『解放』」, *International Symposium 2012, Japan and Southeast Asia: Past, Present, and Future*, Institute of International Relations, College of International Relations, Nihon University, March 2013.

●その他の執筆活動

「文献紹介　戦友会研究会『戦友会研究ノート』」『軍事史学』第四八巻第三号　二〇一二年一二月

「猪木正道さんを悼む―『縁の下』にも労を厭わず」『読売新聞』二〇一二年一一月八日

「追悼　猪木正道―戦闘的リベラリストの生涯」『中央公論』二〇一三年一月号

「猪木正道先生を偲んで」『有信会誌』第五七号　二〇一三年三月

早川聞多

●著書

『別冊太陽　国芳の春画』（共著）平凡社　二〇一二年一一月

『現代語訳 春画』新人物文庫　新人物往来社　二〇一二年一二月

●論文

「人類の始まりと日本人の性文化：浮世絵春画はおもしろい」（講演録・座談会）『人間学研究』Vol. 13　京都文教大学人間学研究所　二〇一三年三月

ジョン・ブリーン

●論文

"The Imperial Oath of April 1868: Ritual, Power and Politics in Restoration Japan," Reprinted in Ben-Ami Shillony ed., *Critical Readings on the Emperors*

of Japan, vol. 3, Brill, 2012.
「知られざる業績：近代日本外交史に果たした明治天皇の役割」『歴史読本　明治天皇　一〇〇年目の実像』二〇一二年一二月号　二〇一二年一〇月
"Fine Words Indeed: Yasukuni and the Narrative Fetishism of War," Inken Prohl and John Nelson, eds, *Handbook of Contemporary Japanese Religions*, Brill, 2012.

●その他の執筆活動
「シンポジウム　明治天皇とその時代―明治天皇崩御百年・明治天皇御生誕百六十年―」明治聖徳記念学会編『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四九号　二〇一二年一一月

細川周平

●著書
『日系ブラジル移民文学Ⅰ　日本語の長い旅　歴史』みすず書房　二〇一二年一二月
『日系ブラジル移民文学Ⅱ　日本語の長い旅　評論』みすず書房　二〇一三年二月

●その他の執筆活動
「宝箱に眠る、とんでもない代物たち。」『Leaf』二〇一二年一〇月号
「〈上野〉に集まる文化人」東京音楽学校校友会発行『音楽』CD-ROMチラシ　不二出版　二〇一二年一一月
「アンケート　眠れぬ夜の本　マイベスト3」『考える人』二〇一三年冬号　二〇一三年一月
「読書アンケート」『みすず』二〇一三年一／二月号　二〇一三年二月
「時計と計時」「鉄路の音《ブリペアド・トレイン》乗車記」『アルテス』VOL. 04　2013 SPRING　二〇一三年三月

松田利彦

●著書

『国際研究集会報告書第四〇集　植民地帝国日本における支配と地域社会』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

『国際研究集会報告書第四二集　帝国と高等教育―東アジアの文脈から―』（酒井哲哉と共編）国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲』（陳姃湲と共編）思文閣出版　二〇一三年三月

●論文

「植民大学比較史研究の可能性／不可能性」酒井哲哉・松田利彦編『国際研究集会報告書第四二集　帝国と高等教育―東アジアの文脈から―』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

「序〈相互参照系〉としての植民地朝鮮と台湾」松田利彦編『国際研究集会報告書第四〇集　植民地帝国日本における支配と地域社会』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

「序」「解説」（陳姃湲と共同執筆）「植民地支配と地域社会―朝鮮史研究における成果と課題―」「植民地期朝鮮における消防組について」松田利彦・陳姃湲編『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版　二〇一三年三月

●その他の執筆活動

「書評　Erin Aeran Chung, *Immigration and Citizenship in Japan*, New York: Cambridge University Press, 2010」『在日朝鮮人史研究』第四二号　二〇一二年一〇月

「翻訳　洪淳権著『日帝下朝鮮の地域社会研究と「草の根植民地支配」について』」「翻訳　朴贊勝著『一九二〇年代初期の朝鮮における青年会運動と支配当局の対応』」（金炳辰と共訳）松田利彦編『国際研究集会報告書第四〇集　植民地帝国日本における支配と地域社会』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

「翻訳　鄭駿永著「京城帝大法医学教室の血液型研究と植民地医学」（金炳辰と共訳）酒井哲哉・松田利彦編『国際研究集会報告書第四二集　帝国と高等教育―東アジアの文脈から―』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

「翻訳　李鐘旼著「日本の植民地支配と笞刑―朝鮮の事例を中心に―」松田利彦・陳姃湲編『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・

満洲』思文閣出版　二〇一三年三月

山田奨治

●著書

"Pirate" Publishing: The Battle over Perpetual Copyright in Eighteenth-Century Britain, Translated by Lynne E.Riggs, International Research Center for Japanese Studies, 2012.

●論文

「模倣と創造の文化史再考」『日本知財学会誌』第九巻第三号　二〇一三年三月

●その他の執筆活動

「中浜万次郎―不運を活かして活躍した日本人」『社会科教育』二〇一二年一〇月号

劉　建輝

●著書

『日中二百年――支え合う近代』武田ランダムハウスジャパン　二〇一二年一〇月

『日華学会関連高橋君平文書資料Ⅰ』国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

『国際研究集会報告書第三一集　東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために』（鈴木貞美と共編　国際日本文化研究センター　二〇一三年三月

●論文

「日本占領下の上海文壇―田村俊子の足跡を中心に」鈴木貞美・李征編『上海一〇〇年――日中文化交流の場所（トポス）』勉誠出版　二〇一三年一月

日文研　五十一号

二〇一三（平成二五）年九月三〇日発行

編　集　磯前順一、光田和伸

発　行　大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国際日本文化研究センター

住所　〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話　（〇七五）三三五―二二二二

ホームページ　http://www.nichibun.ac.jp

印刷　中西印刷株式会社

NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889

日文研　五十一

二〇一三年九月

国際日本文化研究センター